
理由がない悪意のクエスト。

オシノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理由がない悪意のクエスト。

【Zコード】

Z2565Z

【作者名】

オシノ

【あらすじ】

生活に困った冒険者。つまり僕のことなんだがお金欲しさについて、身の丈に合わない仕事を請け負ってしまった。スライムにトルル。マッドサイエンティストが造った【キラーマシン】、拳銃の果てにはベテランの冒険者、あまつさえ王家に選ばれた勇者でさえも手を出さない魔女とまでやりあうことになってしまつ。一緒に戦ってくれる仲間もいなければ、友達もない。孤立無援の貧乏人が、レベル不相応のクエストに挑む冒険ファンタジー。

・冒険のはじまり

+++

お金がない。
安定した収入もない。
人望もない。
恋人もいない。
このままでは、魔王を倒す戦士としてやつていけるかの自信もない。

いや、自信が無いだけなら取り戻せばいいのだが、問題はそんな簡単なモノではなかった。
この先、冒険者としてやつていく展望がなかなか見えないからだ。要するに、今現在のこの職業に一抹の不安を持っている。

考えてみれば三年前。

「僕は、世界一の冒険者になる」と言つて実家を飛び出さしたは良いが、現実はそんなに甘くなかった。

勇者一族の血統を引く人間なら、王家から経済的な支援を受けられるし、なにか他の冒険者が持つてないような特技（例えば魔法）を持つていればギルドからスカウトがきて仕事に困ることもない。が、僕はサラブレッドでもなければ他人より秀でた特技もない。国からの支援も無ければ、ギルドに頼ることもできないのだ。冒険者という人生に、僕は完全に行き詰っていた。

けれども食べていくためには、モンスター や賞金首を倒してお金

を稼がなければならぬ。

今住んでいる部屋の家賃は一ヶ月滞納しているし、水も止められた。

僕は情報を集めるために酒場に来た。酒場のいつかくには情報斡旋所がある。

そこにはこの地域一帯の情報が集まつてくる。

賞金首や、倒すとお金がもらえるモンスターの情報。新しいダンジョンが近場で発見されればそれを教えてもらうこともある。

酒場の端っこにある小さなカウンターが情報斡旋所として使われていた。

一人掛けの椅子に狭いテーブルがあるだけのそのカウンターは、酒場にあるが酒を飲むためにあるわけではない。

そこには何年もこの仕事を続けているであろう、手と顔に長い時間で物語るシワが深く刻まれたバアさんが座っていた。

「仕事の情報を貰いにきたよ。バアさん」

「おお、また来たのかい。ご苦労さんなことだね」

お互いの名前を知らない。それくらいの薄っぺらな関係なのだ。仕事の情報を聞ければ、僕はそれでかまわないと思っている。

「それでどうだい、なにか良い仕事は入った?」

「良い仕事はみんなギルドに持つてかれちまつてるよ。場末のこんな所に回つてくる依頼はどうじょうもない下らないものか、ギルドや勇者でも手に負えないようなギツイ仕事だけさ」

「そんな仕事はやりたくない。」

けど食べていくためにはやるしかない。お金が無いのだ、仕事を選べる立場ではない。

「レベル3の冒険者でもこなせるような簡単なクエストないの？」

「うーん、レベル3ねえ。今は初心者にちょっときびしいような仕事しかないねえ。アンタ特技はなんだい？」

「……特にありません」

自分に自信が無かつたので小声でささやくように言つて、

「なんだつて？聞こえないよ！」年寄りの耳には聞こえなかつたらしく聞き返された。

「うーん、特にないんだけど、じつて言えば孤独に耐える能力が高いですかね」

聞こえるように少し大きめなけで言いなおした。

「……使えないねえ。今の時代は人より秀でたものが一つ一つ、いや三つ程ないとやっていけないよ。だいたい孤独に耐えるって仲間がないだけだろ。それじゃあウイークポイントだよ」

「……」

言われてみればバアさんの言つとおりだ。

・酒場から自警団までの道のり

「今はアンタみたいな低レベルの戦士が単独でこなせるようなクエストはないね」

「そこを何とかお願いします」

手を合わせ、まるで神様を拝むようにバアさんに手を合わせる。

「そんなコト言われたつてないものはないよ。自殺志願者だった別だけどね」

死にたくはない。だがこのまま仕事をしなかつたら餓死してしまう。

状況的には、引くに引けない。

まるで前門の虎、後門の狼。

「畜生……。僕はどうしたらいいんだ」

「そんなに困っているなら借金でもしたらどうだい？」

何を言っているんだこのバアさんは。ギルドにも属していないこんな低レベルのただの戦士に金を貸してくれる金融業者なんて、何処にあるだろうか。

あるわけがない。僕が金貸しだつたら絶対に貸さない。

「借してくれる所なんてありませんよ。あー、僕にいまだ目覚めぬ、眠れる力とかが宿つていればいいんだけどなあ。その力は強力な魔法で、ドラゴンでも一撃で倒せるみたいな

「何言つてるんだい。人生はそんなに甘くないよ。そんなモノあるわけないだろ」

軽く怒られた。夢も希望もない人生だ。

「まあ、そんな話しあうでもいいんですけど、ちょっと無理田の依頼でもいいんで、何かないですかね？」

「ないよ。また違う田に来な」

おそらくもう僕の相手をしたくないのだが、少し機嫌が悪くなつてきた。

「そんなこと言つて、良い依頼を隠してるんじゃないの～？」

バアさんに食こ下がる。

「しつこい！」

怒鳴られた。怒らせてしまつたようだ。

これ以上機嫌を損ねたら、依頼を斡旋してもらえなくなる。僕はこれから付き合ひを考えて酒場を出ることにした。

「町の近くにいるスライムや、吸血ゴウモリを倒しても金にならないしなあ」

町の自警団に属していれば、迷惑モンスターを倒した場合に討伐料が出るのだが、僕が勝手にモンスターを退治しても何もでない。骨折り損のくたびれもつけだ。

くたびれるどころか死ぬ危険性まである。

なんとか日銭を稼げる方法を考えるけど思いつかない。
人間、地道に働くなくてはいけない。

けれども今の状況の僕では、それをする事もできないのか

まあ、何でもいいからできる仕事を探すか。

この際、モンスター退治やダンジョン探索の仕事じゃなくても良いんだ。

道具屋や武器屋でも、この際ゴミ掃除やパン屋でもいい。
生きるために働く。

僕は、町の入り口の近くにある自警団の建物へ歩いていく。

自警団は町をモンスター や 盗賊から守るだけでなく、町の治安を守つたり、落し物を探したりしてくれる。

道に迷った時なんかは場所を教えてくれたりもするのだ。
僕はその建物の入り口に立っていた人物に声をかける。

「すいません。ちょっと職業安定所までの道を教えてもらいたいんですけど」

職業安定所とは、仕事がない人に働く環境を提供してくれる場所のことであった。

・自警団にて

入り口に立っていた人が道案内担当の人を呼びに行く。
椅子があつたので、座つて待つてると目の前に賞金首の張り紙があつた。

・狂った科学者の操る【キラーマシン】

研究所を自らが作ったマシンで全て破壊した科学者。犯人以外の研究員は全員死亡。

賞金：15000ゴールド

・人喰いピーグル

狂犬。飼い主の命令を聞かない。捨てられた。

賞金：800ゴールド

・墮ちた天使

人を食うことを見てしまつた天使。一度人の肉を食べた天使はその味を忘れない。

光術系の魔法を使う。

賞金：24000ゴールド

・始の魔女

以前この国を救つた英雄の一人。国王に逆らつたために賞金首になつた。

道具に魔法をこめることができる。

賞金：99999999'ゴールド

おいおい、最後の魔女の賞金。シャレになつてない。

こんな敵に合つたら、僕なんかは一瞬で消し炭になつてしまつ。間もなく奥のほうから、自警団の人が来た。さつきとは違う人だ。きつと、道案内を担当している人だろう。僕に近づいてくると、声をかけてくれた。

「えーっと、職業安定所までの道のりだつたかな？」初老の男性だ。着ているねずみ色の制服は、良い感じに使い込まれている。

古くなつてはいるが、キレイな制服。

「はい、お願ひします」

僕がそう話すと道順を教えてくれた。

あまり解りやすくなかったので紙に道順を書いてもらひ。ビリやセリの町の役所近くにあるようだ。

ここからそんなに遠くない。歩いて行くことじよつ。

「ちなみにさつきその張り紙見てたよね？」

道を教えてくれた自警団の人があさづけてくる。

「ああ、賞金首が載つてるやつですね」

「何か情報あったら、すぐに教えてくれよ

「いいですよ。解りました」

「ただし、見つけても絶対に手を出すなよ……特にキラーマシンと魔女はな。殺されるのがオチだぜ」

言われなくともわかつていた、僕のレベルで勝てる相手じゃない。キラーマシンや魔女と言わず、どれと戦つても一瞬で負ける自信がある。

・研究所

+++

「チクショウ……。口クな仕事が無かつたぜ」

やはり職業安定所に行つてもたいした仕事が見つかからなかつた。
保証人がいない人間には、まつとうな仕事がないらしい。

唯一あつたのは『研究所での実験お手伝い』のみ。

仕事の説明が書いてあるパンフレットには、
短時間で高収入を目指す人集まれ。

保証人不要。

年齢、経験不問。

給料即日払い。

資格必要なし。

くわしい実験内容は、集合場所で説明させていただきます。
やる気がある人を募集しています。
なんてことが書いてあつた。

この募集内容から察することができる。
要するに誰でもいいってことだろ。

「すげえ怪しい」

何をさせられるのだろ？

研究所での実験と言うからには、

怪しいクスリを飲ませるのだろうか。

それとも怪しい人体実験が行われるのだろうか。

怖い。 すげえ怖いけどやるしかない。 でもまあ、とりあえず行つてみて駄目そうだったら帰つてこよう。

その時の僕の考えは、そんな感じだった。
でも、この時の甘い考えのせいとんでもない事件に巻き込まれることになるのだ。

＊＊＊

仕事するための研究所に着くと、そこには結構な人数が集まっていた。

筋肉ムキムキで、体中に傷がある戦士。

老齢の魔術師。 杖は相当使い込まれている。

この地域ではあまり見ることがない魔獸使いまでいた。

使役している魔獸は、

【八愛】 猫を大きくしたような魔獸。 強力な牙で相手を噛み碎く。 人なつっこい。

【一角】 人間に成り損ねたサルの成れ果て、鼻の所にある角で敵を貫く。

【波紋】 詳しい能力は知らない。
見るからに歴戦の猛者だ。

しかも、そんな連中ばかりではない。

どう見てもズブの素人のような冒険者も結構いる。2～30人と
いった所だろうか。

装備してるモノがお粗末だ。

ほとんど使ったことがないような、真新しい剣や鎧を装備してい
る。

おそらく短期間、高収入という内容に惹かれて来たんだろう。
もちろん僕もその中の一人であることは言つまでもない。

・研究所でのアルバイト！

+++

「「」の研究所での仕事を始めてもう一つ前に説明があります」

そう言つたのは、見た目が若い女性だつた。

少しだけ笛のような形の耳から察するに、エルフの血を引いているのだろう。

正確な年齢はわからない。

エルフ族の寿命はあきれるほど長いからだ。

例えわずかながらでも、エルフの血が混じつていれば相当長く生きられる」ことができる。

「実験を始める前に、みな様にはこの待合室で順番待ちをしていただきます」

今いるこの部屋は相当広い 待合室ついづより、運動場、もしくは闘技場といったほうが相応しい感じだ。

場所は地下一階にある。遙か上にある天窓から光が入ってくるため暗くはない。

耳のとがった女性の話す内容は決まっているのであります。手にあるメモ紙を見て淡々と説明をはじめた。

「今から番号札を配ります。それは無くさないようにしてく

ださい。

説明する内容は、簡単なモノです。

実験が始まつたら、この部屋からスタッフはいなくなります。

我々スタッフは全員、研究で手が離せなくなるためこの部屋にいることはできないからです。

実験が始まつたら、研究所の機密情報の管理関係上、みな様はこの部屋から出ることができなくなります。

私はこの部屋から退出しますが、その時に外側から鍵をかけさせていただきます。

その鍵は実験終了後に解除されますので、トイレなどは今のうちに行つておいて下さい。

誰か生きたい人はいますか？

誰もいないうですね。

行われる実験は3段階ほどありますので、皆さんにやつていただぐコトはそのつど説明いたします

以上が説明の内容。

「なにか質問はありますか？」

耳のとがつた女性がそう言つと、僕の隣にいた男が質問をする。

「今からこの仕事をやめたいと言つたら、それは可能なのかね？」

先ほど、この研究所の入り口で見かけた老魔術師だ。

「ええ、かまいませんよ。ただし、この部屋には残つていただきます。実験には協力せずこの部屋の椅子にかけてお待ちください。すべての実験終了後に依頼キャンセルの手続きをとらせて頂きます」

質問はそれだけだった。

そして、実験は始まる。

「これはハメられたかもしけんのお」
僕の隣にいた、老魔術師が言った独り言が聞こえてきた。

・研究所でのアルバイト！！

++++

やがて、耳の長い女が部屋から退出すると鍵がかけられた。これで実験が終わるまで誰も外に出ることができない。

室内放送が流れた。

締め切られた部屋で、先程の耳の長い女の声が聞こえた。

「それでは実験を始めさせていただきます。まず皆さんは、部屋の奥から出現するマシンと戦っていただきます」
たったそれだけ言うと放送は終わってしまった。

さつき老魔術師が言っていた言葉が気になっていた。

ちょうど僕の隣に座っていたので質問をすることにする。

「なんですか。ハメられたって？」

「今にわかるじやろ」

そつけない答えが返ってくる。

目の前から何かしてきた。先程アナウンスされた実験のための機械が出現する。

人間を模したマシンのようだ。

馬鹿でかい体は金属製の三角すいを逆にしたようなカタチをしており、そこから細長い手と足が生えている。

左手には、銃弾を連射できるガトリングガン。

右手には、とうてい人間には扱えないだろう、大型のサーべルが装備されていた。

人間に例えると顔に当たる部分には、簡単なカメラが付いている。継ぎ目の少ない流線型をベースにした無機質なデザインが不気味さを漂わせる。

装備されている武器から想像するに十中八九、戦闘用のマシンといふことで間違いないだろう。

「ん？ 何処かで見たことがあるな」

最近、見たような記憶があるのだが思い出せない。僕はしばらく考えていると誰かの叫び声が聞こえた。

「うわあああああ！ 賞金首リストのキラーマシンだ！！」

僕はその声を聞いてやつと思い出す。

道を聞いた自警団で見た賞金首リストの張り紙に載っていた賞金首。

【キラーマシン】が現れた。

キラーマシーンは戦闘体勢をとっている。

左手のガトリングガンを構えた。

「ほらの」「ほらの」
老魔術師が言つたとおりだったといつた顔で僕に話しかけてくる。

「これはどういふことですかね？」

田の前で起きたことに思考が追いついていかない。

僕は何が起きているか理解できていなかつた。

「閉め切られた部屋に賞金首がいる状況が作られた。最初の女の言つていた実験というのは、このマシンの性能テストと言つたとこ

るか……」

老魔術師がやつ言い終わると、

「嘘は言つてませんよ。この実験が終われば皆さんはこの部屋から出られますし、お給金もお支払いします」

さつきの女の声が部屋のスピーカーから聞こえる。

「ただしあれひこの部屋から出したいの話しだすナゾ」

・研究所でのアルバイト！――

+++

部屋の中は、混沌としていた。

戦闘体勢を取る者に、最初から勝てないと踏んで逃げ惑う者。

部屋から逃げるために入り口のドアを開けようとする奴もいたが、鍵がかけられた金属製の分厚い扉はビクともしなかった。

そんな逃げ惑う者達に向かつて【キラーマシン】が左手のガトリングガンで攻撃する。

炎撃の銃弾で攻撃。

入り口付近にいた男に、全弾命中。

攻撃を受けた男はダメージを受けた後に炎上。消し炭なつて死んでしまった。

それを見た多くの人間は、後ずさる。

たつた一度、今の攻撃を見ただけで攻撃力の違いが解つた。

それほどまでに圧倒的。高額賞金首である【キラーマシン】の戦

闘力は異常だった。

『戦つたら殺されるのがオチ』

自警団の人々に言われたことは間違ひではなかつた。

部屋に絶望に似た雰囲気が流れ始める。

その中で勇敢にも戦いを挑む者もいる。

いくつもの厳しい戦闘をこなしてきた、戦闘のプロ。

体中に傷がある戦士と魔獸使いが戦闘態勢に入る。

老魔術師は、まだ戦闘に参加する気配はない。様子を見ているのだろう。

正直な所、僕は賞金稼ぎではない。ここは専門家に任せるとじよつ

魔獸使いは使役している【八愛】【一角】【波紋】を放つた。

【キラーマシン】にいつせいに襲い掛かる。

しかし、全くダメージを与えられない。

【一角】は角が根元から折れてしまい戦闘不能。

【キラーマシン】は雷撃の銃弾を放つた。

左手に装備されたガトリングガンから、雷撃の特性を持った銃弾が無数に発射される。

【八愛】に命中。死んでしまった。

銃弾だけで死んでしまった【八愛】の死体に電撃の魔法が発動。バリバリといった激しい音と共に、死体は消し炭になり無くなってしまった。

【波紋】がキラーマシンに襲い掛かる。体にへばりつき自爆した。強烈な衝撃波と炎がキラーマシンを襲う。

爆風が部屋全体に吹き荒れる。

キラーマシンは、鉄でできたボディが少し歪んだ。魔獸は全部死んでしまった。

使役している魔獸が全滅してしまった魔獸使いは、逃げようとしている。

【キラーマシン】は、右手のサーベルで魔獸使いを攻撃した。魔獸使いは、真っ二つに切り裂かれされ死んでしまった。

それを見ていた老魔術師は、

「コレはまずいのう」と話す。

「そんなこと言われなくともわかっていますよ！」

見れば解る。強力な魔獣を使役している人間が一瞬で殺されたのだ。

残った奴ら全員で戦つても勝てる可能性は少ないだろ。

・研究所でのアルバイト！！！

+++++

部屋の残り人数は、後半分といったところだろうか……。
ずいぶんと減ってしまった。

【キラーマシン】に戦闘を挑んでいった冒険者はみんな死んでしまった。

僕が殺されるのも時間の問題だ。

「おまえさん。ワシに協力するなら助けてやるぞ」
老魔術師に話しかけられる。

「なにか作戦があるんですか？」

喜んで協力しよう。

どうせこのまま手をこまねいてもゲームオーバーなるだけだ。

「お前をワシが使う転送の魔法でこの部屋から出してやる」「

転移魔法。人の体を離れた場所に転送する。

高度な魔法技術が要求されるため、使える人間は一握りだけ。
転送できる距離は、術者の能力に比例する。

「おお、使える人間始めてみた。すごいなジイさん」

そんな便利な魔法が使えるんだつたら、この閉ざされた部屋から
脱出できる。

「しかし、条件がある」

「なんだよ」

悠長に話してる暇はない。いつ敵に襲われるか解らないのだ。

「実はワシの魔法なんじゃが……。自分以外の一人だけしか転送できない。魔力の関係から使えるのは一回だけ、そして距離は3メートルほど」

「短い距離でも、この部屋から出られればいいけど……」

例え僕がこの部屋から出れても、中に残ってる奴は逃げられない。みんなキラーマシンに殺されてしまうだろ。

「それでこの部屋から出て、やつてもうこことがある」「なにをやればいい?」

老魔術師は頷いて話しだした。

「あそこで暴れている【キラーマシン】、おそらく部屋の外に操つてる奴がいる

「そうなの?」

「ウム。あれはモンスターじゃない。魔法で動く機械じゃ。だから単独で動くことはできない」

「そういうものなんだ」

僕は頷いて話を聞く。

「そして、操つてる奴なんじゃが　おそらく戦闘力は低いだろ

う

「なるほど。だから僕たちを、この部屋に隔離したわけだ……」

「その通り。だからこの部屋から出た後にそいつを探し出して倒して欲しい」

「ジイさんは、誰が操つているのか心当たりあるのか?」

「わからん。じゃが、あれ程大きな機械を操つていてるのだから相当な集中力がいるはず」

「とりあえず動きを鈍い奴を探せばいいか……」

「そうしてくれ。ここはおそらく、後10分もたないじゃん?」
急いで行け

「わかりました」

二人でやることを確認し終えると、老魔術師が魔法を唱え始める。僕は、詠唱に邪魔が入らないように辺りを見回す。高度な魔法には、とてもない集中力がいる。この魔法は失敗するわけにはいかないのだ。

しばらくして詠唱が終わると、僕の体はスライムのようなゲル状になつてドアの隙間から出ることができた。

「なんか思ったのと違うな……」

魔法により体が光に包まれて移動するのかと思ったら、そつではなかつた。

・アルバイト終了

外に出で一一番最初にやることは、ドアが開閉できるかの有無である。

内側から開かなくとも、外側からは開けられるかも知れない。けどそれは甘い考えだった。

この扉にはドアノブがない。どうやら魔法で開け閉めするタイプのようだ。

急がないと中にいる奴らがどんどん死んでいつてしまつ。ドアはあきらめて、当初の予定通り【キラー・マシン】を操つて、敵を倒すこととした。

似たような扉に向じつくりの通路。

これでは自分が何処にいるか解らなくなる。

でもある程度田畠はついている。

頭の中で最短ルートを計算し、そこに向かつて全力で走った。

マシンを操つている術者は、無防備になる。といふことはなるべく離れた場所に身を隠すのだろうか。でも、あまり離れすぎると【カラーマシン】のコントロールができなくなるかもしれない。

あれだけゴツイ機械は、遠方から操るとなると相当厳しいだ

る。

近くで身を守ることができる「安全な場所」
僕が今までいた部屋は地下一階だった。この建物の最下層の場所
である。

ということは

おそらくこの場所にいるに違いない。

1階にある『ミーティングルーム』
ちよど僕がさつき【キラーマシン】に殺されそうになっていた
部屋の真上に位置する場所。
さつきの部屋に一番近い。
でも階が違うから、この場所に来るまで時間がかかる。だから安
全。

目的地に着くや否や、僕はそのドアを蹴破る。
予想通り人がいた。

僕らに実験の説明をしていた、エルフの血を引く耳の長い女だ。

「なんですかアナタは？」

「……まさかアンタが狂った科学者だったとはね。悪いけど時間
がないから。サクッと殺らしてもらおうぜ」

僕はそれだけ話すと、腰にさしていった剣を抜き相手に突きつける。

「ちよっと待って下さーー。キラーマシンを止めますから見逃して
ください！」

慌てふためく耳の長い女。

この反応。やはりこの女で間違いなかつたようだ。

「ここからじゃあ、【キラーマシン】が停止しているかどうか確
認できない……。しかもこの間に人も死んでるかも知れない。だから
から駄目だ」

僕はそう話すと、耳の長い女に斬りかかった。

一撃で力タがついた。

老魔術師が予想していた通り、操っている奴は弱かつたのだ。
耳の長い女が倒れると、彼女の体からアイテムが落ちる。

→キラーマシンの腕輪くを手に入れた。

+++

けれど一足遅かったようだ。

急いで一番最初にいた部屋に戻ったが全員死亡していた。

・アルバイト終了 その後

+++

僕の命の恩人の老魔術師。

助けられなかつた。亡骸は土に埋め、墓標の代わりに魔術師が使つていた杖を立てる。

「助けられなくて、すまなかつたなジイさん……」

歩きながら考えた。

イロイロなことを

これから的生活、戦い、人生。でも考えるだけだ。いつもどおりだ。

「まずは、自警団に賞金首を倒した報告をしないとな」「賞金首を倒したことなどないのでどういった手続きをすればいいのか勝手がわからない。」

まあ、行けばなんとかなるか。そんなことを考えていた。

^キラーマシンの腕輪^を装備した。

手に入れたアイテムはまず使ってみないといけない。

「僕に使うことができるのか

エルフが使つていたアイテムだ。魔法が使えないと作動しないのかもしれない。

試しに今度の戦闘で使ってみよう。

しばらく歩くと町に着いた。なんとか無事に帰つてくれる」とができた。

まずは、自警団の建物へ行く。

そこで賞金首討伐完了の手続きをする。書類に住所と名前、年齢。そして、賞金首を倒した経緯を書かされた。

その後に簡単な、口頭での聞き取りが行われ終了。

後日、現場検証と死体の本人確認が完了したら賞金を受け取ることができるらしい。

だいたい一週間ですむこと。

「そんなにかかるのかよ。もう5ゴールドしかもってねえよ」最初の予定だと、即日で給料がもらえるはずだったのだ。
今日、お金が入ると思ってたのに……。

途中から賞金首討伐のミッションになってしまったのは予定外だった。

けどそんな文句言つていっても仕方ない。

「まあ、いいや。あの状態で生き残れただけでもめつけもんだ」

今日のところは大人しく家に帰つて、有る物で飢えをしのぐつ。そしてぐつすり寝よう。
すげえ、疲れた。

家に帰り、部屋に入ろうとすると大家さんに声をかけられた。

「アンタ、ずいぶん帰つてくるの遅いじゃない。何してたんだい？」

(しまつた……。今一番会ってはいけない人物に遭遇した)

「いやあ、ちょっと野暮用で……」

「そうかい、まあそんなことはどうでもいいんだけどさ。滞納してる家賃は何時払ってくれるのかね?」

言われると思つた。最近顔を合わせるたびに聞かれる。
なんて金の取立てにきびしいババアだ。

まあ、2ヶ月も家賃を滞納してれば当然のことなんだろうな。」「あ~、ごめんなさい。2週間後には間違いなく払いますんで、もうチヨット待つてもらつていいですか」

「何言つてるんだい。そんなの信用できないね!何度同じセリフを聞いたことか」

「そこをなんとかお願ひします」

手を合わせてお願いすると大家さんは、

「一週間だけ待つてやる。それ以上遅れたら今度こそ出て行ってもうつよー」

と吐き捨てるように言つと家に帰つていった。

「ふーっ。やっぱりお金払う期口。長めに言つておいて良かったあのババアの考え方なんてお見通しだぜ。」

そのまま、自分の部屋に入ると一息つく。

「ノドがかわいたな」

そう独り言を言いながら水道の蛇口をひねる。

何も出でこない。

そうだ、水を止められていたんだつた……。

僕は、だいぶ前から水道料金も払つていなかつた。

・トロルとの戦い

+++

「スライムって食えるのかな」

そんなことを考えていた。あまりにも腹が減りすぎていたために。家にある食料は全部食べてしまった。

水は公園でなんとかなるから大丈夫だ。

残り少ない手持ちの金で買えるものなんて町になかった。

隣に住んでいる人に言つて何か食べられる物を分けてもらおうか

……。

でも、朝会つた時に挨拶するぐらいの面識しかないのに、いきなりそんなこと言つたら変な奴だと思われるよな。

そんなことはできない。

賞金の受け取りまで、後6日。

なんとなく町の外に出ることにした。

ここから先はモンスターが出る。

スライムが食べられるかどうか実際に試してみようと思ったのだ。それが駄目だったら、そこいら辺に生えている雑草を採つて食べてみよう。

しばらく歩いていると、ここいら辺で一番メジャーなモンスターに出会わした。

狙いどおりだ。

ブルーの半透明で、ドロドロとしたゲル状の体が特徴のモンスター

一。

スライムが現れた。

僕は腰にさしてあつた剣を抜き、スライムに斬りかかった。
スライムにダメージをあたえる。

スライムの反撃。

弾力性のある体で体当たりしてきた。

僕は吹っ飛ばされて地面を転がる。

「いってええ！」

結構なダメージだ。

世界で一番弱いモンスターなのに大苦戦だ！
体勢を立て直してもう一度、斬りかかる。

スライムに剣を避けられた。

スライムは、体をムチのようにしならせて攻撃してきた。
急所に入つた、鈍い音がする。大ダメージ！

僕はスライムの攻撃の反動で地面に叩きつけられた。
当たり所が悪かつたんだろう。

口から血が出る。

「ヤバい……。内臓がやられてたら重症だ」

僕は逃げ出した。

「情けねえ……」

スライムにさえ勝てないのか。
いや、きっと腹が減っていたせいだ。
間違いない。

そうに決まってる。

そうであつて欲しい。

ダメージを受けた所を確認したけど、大丈夫なようだ。

血が出たのは、口を切つただけだろう。

「ハア～」

大きなため息をつくと

「キヤ !！」

女性の悲鳴が聞こえてきた。
声のするほうに駆け寄る

すると少女がモンスターに襲われてる。

人間の大人の5倍はあるだろう大きさ、緑色の醜い体。
手には巨大な棍棒。

「トロルかよッ！？」

何でこんな所にいるんだよ。

比較的安全なこちら一帯の地域には出現しないはずのモンスター。
腹をすかせて山から降りてきたのだろうか。
なんにせよスライムに歯が立たない人間では倒せるわけもない。

トロルが現れた。

トロルは少女に向かって棍棒を振りかざす。

「あぶねえッ！」

そう叫ぶと僕は、その場にタックルするような体勢で飛び込み、
少女の体を抱えて敵の攻撃をかわす。

棍棒の強力な一撃ですさまじいい轟音と共に 地面が砕けた。
大きな穴が開く。

意表を付かれたトロルは攻撃をミスした。

トロルは体勢を整えている。

どうしようあんな攻撃食らつたら一撃で終了だ。

僕の人生が。

少女が一緒にいるので戦闘から逃げることもできない。

・Hルツの少女

+++

少女は真っ白いワンピースの上に、同じ色のコートを着ている。袖とスカート、そしてフードの部分に赤い文字の紋様が描かれていた。

高度な魔術文字を意味するものだ。

きっととんでもない値段がする高級品の服だ。

僕はそんなどうでもいいことを、戦闘中に考えていた。

「大丈夫か？」

少女に声をかける。

「はい、なんとか」

避ける際、何処かに頭をうつたのだろう。

頭を左右にフルフル振っていた。

だが今はそんなことを気にしている場合じゃない。

「逃げられるか？」

他の選択はない。

少女にそう尋ねると、

「ごめんなさい。足をくじいたみたいで……動けません」と答えた。

「マジかよ」

「私を置いて逃げてください、あとは自分でなんとかしますから死ぬつもりだ。

おそらく冒険者だらう。死に際を心得ている。

「そんなことできるかよ

と言いながらトロルはビーファーることもできない。
どうしよう。

「では私が呪文を唱えている間、時間を稼いでもらつていいです
か」

「わかった！」

無理無理無理無理。

いきおい返事しちゃったけど絶対無理。

無理だけどそれしか選択肢は無い。

彼女にはトロルに対向出来る魔法があるので、

彼の方を見ると、すでに詠唱に入っている。
もう移動はできない。

どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう。

棍棒を受け止めたら僕が死亡。

棍棒を避けたら少女が死亡。

どちらにしても死人が出る。

そうだ、まだ使つたことないけど……

→キラーマシンの腕輪くを使つた。

地面上には光の魔術文字で描かれた魔方陣が現れた。
それに光が集まり【キラーマシン】が実体化。

キラーマシンが戦闘に参加する。

トロルはキラーマシンに向けて強烈な一撃を放つた。
棍棒がキラーマシンにヒット。

ノーダメージ。

【キラーマシン】は戦闘態勢に入っている。

- ・使える武器は右手のサーベル。
- ・左手に魔法の弾丸を連射できるガトリングガン
 - 雷撃の弾丸
 - 氷撃の弾丸
 - 炎撃の弾丸
- ・特殊能力：➢自爆

僕は右手のサーベルを選択した。

キラーマシンはトロルに襲い掛かった。

右手のサーベルで切りつける。

グチャリ という鈍い音がした。

トロルの頭は剣圧によつて潰されて、体は真つ二つになり倒れる。モンスターを倒した。

「うわあ……。エグい」

僕の目の前にいたトロルは、グチャグチャの真つ二つになつて死んだ。

キレイに分断されているのではなく、力任せに切り裂かれた感じで。

「ありがとうございます。私の魔法は必要ありませんでしたね」助けた少女に笑顔で話しかけられた。

「いやいや、……まあね。怪我はない?」

自分が使つた【キラーマシン】の威力に自分でドン引きしながら答える。

「たいしたことではありません。大丈夫です」

さつきは戦闘中でバタバタしていたから気づかなかつたけど、少女は笛のようなカタチの耳をしている。

先程の戦闘で詠唱していたスペルは黒魔法の一種……。

エルフの魔法使い。

でもおかしい。そんなエルフが存在できるのだろうか。
森の守護者であるエルフ族が使う魔法は、黒魔術ではなく精霊な
のだから。

・エルフの少女 2

+++

助けた少女は足をくじいていたので「おぶつて町まで行ってあげようか?」

と提案したが断られた。

きつと恥ずかしいのだろう。

でも、ちょうどいい。

少女を背負つていつたら、僕の残り少ない体力は無くなり死んでいたかもしれない。

もちろんトロルではなくスライムにやられた時の傷が原因で。

「君、純粋なエルフなの?」

「はい、そうです。こいら辺では珍しいのですか?」

「あんまり見ないね。こいら辺は辺境だから

(さすがエルフ、超美形だ)

超可愛い。いや、美しいといった方がいいだろう。

一見すると幼い感じがするのだが、ひとつひとつの所作が落ち着いている。

エルフということから、恐らく見た目どおりの年齢ではないのだ

芸術家が大理石から削り出したような、整った顔。

体のラインこそゆつたりとした服を着ているため判断できないが、短いスカートから出たほつそりとした長い足は、年齢不相応の妖艶

な雰囲気を漂わせる。

左の大ももの部分には、古代魔法の文字が刺青として刻まれてお
り、いやでも目がそこにじつてしまつ。

白魚のようなほつそりとした指は、美しく長い。ここには刺青は
無く、指輪もしていなかつた。

普通の冒険者は自衛の目的から、選ばないだらう純白の魔導着。
そこに書かれた血のように赤い文字はさらに術者を目立たせている。
服が少女を引き立て、少女もこの服を引き立てる。

一般的な魔法使いがよく使用する、詠唱用の杖は装備していない。
代わりに持つてゐるのは、左右の腕に銀色の腕輪、素材はプラチナ、
ピンク色の宝石で古代魔術文字が刻まれている。

エルフの特徴である長い耳と同じく、大きな目も少しだけつり眼
でありそれがなんとなく色っぽい。

唇は桜色で、髪はブロンド、そして瞳は紅い。
(紅い眼のエルフ……)

柔らかそうな唇から言葉が紡がれる。

「お兄さん、すごいですね。あんなに強いモンスターを一発で倒
しちゃうなんて」

「まあね」

自分でもびっくりだ。ハイラーマシンの腕輪くはなるべく使わな
い方が良いかもしねない。
強力すぎるからだ。

「無駄な脂肪や筋肉が無いスリムな体つきですね」

「…………まあね」

ヒヨ口いだけだ。貧乏で何も食つてないから細いんだよ。

「きっとレベルもすぐ高いんですね?」

「…………まあ……ね」

レベルは3しかありません。

最近強い敵を2体ほど倒しているが、自力で倒していない。

キラーマシンは操つていてる女人の人を倒しただけだし、トロルはキ

ラーマシンが倒した。

これではレベルが上がるわけがない。

町の入り口が見えてきた。ここまで来れば安全だろう。

とりあえず彼女の怪我を見てもうつために医者に行かなくてはいけない。

・フィウォン レイーのお礼

+++

エルフを医者に見てもうつたところが、怪我はたいしたことないらしい。

かるい捻挫だそうだ。

彼女はこの町の住人ではなく。旅の途中でモンスターに襲われてるとこを、僕に助けられたとのこと。

「ねえ剣士さま、お礼がしたいんですけど。これから時間あるかな？」

妙に支配的な紅い瞳が僕を見つめる。

「別に気にしなくていいよ。当然のこととしたままでだから」「そう言わずに、お食事でもどうかしら。」「馳走しますよ

これは飯にありつけるかもしない。

今日のところは、これでなんとかしのげる。

「……じゃあ、せつかくだから」「馳走になつたらやおうかな」

「やうじとよ。このままお礼もせずに帰してしまつたら申し訳ないし」

「ではお葉巻に甘えて」

僕たちは、食堂やレストランが集まっている通りを行つてお店を探すこととした。

歩きながら会話をする。

「私の名前はフィウォン・レイー。剣士さまはなんて言うのか

しり?」「

「初めて乗るけどの駄前ではないよ

一度は言ってみたかったセリフだ。

ていうか下手に名前を教えたらレベルがバレる。これでも一応、冒険者として国に登録されているのだ。

「ふふッ、変った方ですね」

ピンク色のちこちな唇の端が、ほんのちよつとつりあがる。

「ていうか剣士をまつて言うのはやめてくれ。そんなガラジシャン

い

まともに剣を使ってないので。

今日なんてスライムも倒せなかつた。

「いいよ。じゃあお兄さんって呼んであげる

「そうしてよ」

エルフの年齢がわからない。

僕はなんて呼ばばいいのだろう、なんて考えていると、

「私のことは、フイウでいいよ~」と言わた。

「わかつた

敬称が『ちゃん』にすればいいのか、『さん』にすればいいのか

解らん。

とりあえず呼び捨てでいいや。なんか言われたら変えよう。

しばらく歩くと目的地の通りに到着した。

中央のほうまで歩いていくと高級レストランが並ぶ場所に出る。

「ねえねえ、お兄さん、お兄さん。食事はこのレストランなん

てどう?」「

「.....」

すげえ高そうなレストランなんですけど。

城でもないのに、なんで店の前に門があるの。

門のところには、衛兵の代わりに黒い礼服をきた男が立っている。

「わたし、ここで食事したいなあ」

紅い瞳に見つめられると、なんとなく迷いつことしかできない。

「僕は別にかまわないけど、この格好じや断られるんじやないかな」

小汚い皮の服、しかも帶刀している。

こいつた場所は、きちんとした格好じやないと断られるはずだ。

「きっと大丈夫だよ。わたしが確認してきてあげるね」
フイウは、礼服の男に近づいていった。

彼女は、男と一緒に会話をすると、さりげに手を振ってきた。
「OKだつて~」

(……まじつか)

僕はこんな高そつな店で食事したことが無かつた。

・フィウォン レイニーのお礼 2

++++

店に入ると、背広を着た男に案内される。

僕は持っている剣を預け、フィウは上着を男に渡す。

上着を脱いだ彼女は、袖がない白いワンピースだけになる。
背の低さや体のシルエットから幼く感じていた雰囲気が、よういつそう強くなつた。

ほつそりとした長い足に続き、あらわになる白い両腕。

冒険者とは思えないような、傷がないきれいな肌。

赤い文字の刺青があるのは、左の太もものところだけのようだ。
スカートの少し下、根元に近い場所の後ろ前に円を描くように刻まれている。

手や腕はもちろん首のところや、胸元もきれいなものだ。
なんとなくフィウに田字がいつてしまう

それを見ていた彼女は、僕に妖しく微笑みかける。

通された席は、道路側で窓から外を見ることができた。

僕はお店の人メニューを手渡された。

「さて、何を食べようかな」

と思つたが字が読めねえ。

ていうか値段が載つてない。

「お飲み物はいかがいたしましょう?」

(えつ、何か頼まないといけないんですか……)

飲み物を注文しないといけないような雰囲気が、その場に流れる。だがメニューが読めないのでどんなモノがあるかわからない。

「フイウは何頼むんだい?」

彼女だったら、この何だか解らない文字で書かれたメニューを読むことができるであろう。

なにせ、自分でこの店を選んだのだから。

同じものを頼んでやる。

「お兄さんと同じものでいいよ」

「じゃあ、アルコールが入ってないやつでさっぱりした飲み物って、どんなモノがあります?」

やられた。

無茶振りだ。

仕方ないので、お店の人適当な質問をする。

「ではグレープフルーツと炭酸水を使った、当店オリジナルのノンアルコールカクテルなどはいかがでしょうか?」

「おいしそうですね。ではそれを2つお願いします」

「かしこまりました。それでは、今お持ちいたします」
疲れる。右も左もわからないから非常に疲れる。

「良い雰囲気だね、このお店」

「そうだね」

どんな料理があるんだかさっぱりわからぬ。

その後、飲み物を持ってきたお店の人に片っ端から、メニューに載っているのはどんな料理か聞きまくった。

・フィウォン レイニーのお札 3

+++

高級レストランで食事をしながら僕らは話をした。

「そういうえば、あのトロルを殺した機械の話なんだけど」
フィウに質問された。

「キラーマシンのことか。あれがどうかした」
「あれ…何処で手に入れたの？」

「この地域の国境近くにある研究所だよ」

「へえ」

フィウはなにか含みのある感じで答える。

「アルバイトで行つた時に、その研究所で賞金首と出くわして戦
つたんだ」

「【キラーマシン】って、高額賞金首だよね。確か15000バ
ールドの」

「そうだね」

「どうか食つていいモノがうまい」

子牛のなんたら煮込み、なんとか風といふ見えられないよつな名

前の料理。

ソースが絶品で、肉が舌の上でとろけるようだ。

田の前のフィウが、僕に話しかけてくる。

レストランの中の暗い部屋で口ウソクの火が揺れる。

その火に照らされたフィウの体が、少し艶かしく映し出された。

「そんな強い敵を倒すなんて普通じゃないよね。お兄さん」

「まあ、運が良かつただけだけだよ」

「ホントに。ただそれだけ。

「よかつたら。そのゝキラーマシンの腕輪くをわたしに譲りてくれないかな？」

「え？」

「わたしにくれたら、とってもこっこいとこがある」

「……」

「どんなことだと思つ?」

「ああ」

「ひとつも気持ちいい」と

「ダメだ。子供がこんなモノ持つてたら危ないだろ
フィウは子供だからどうだかわからんし、僕が持つていっても危ない
ことに変りないけど。」

「ちえー」

舌打ちをして悔しがるフィウ。その反応だけ見るとホントに子供
のようだ。

「飯を食べ終えると彼女が泊まる予定の宿まで送つて行く」と
なつた。

「明日、この町を案内して欲しいな

「うへん、明日はちょっと忙い……」

言いかけたところで、フィウに話しかけられる。

「案内してくれたら、お礼300ペナルド出すよ」

「マジックですか」

「」飯代も私が出してあげる」

やねしかねえ。どうせ明日の仕事のアテがあるわけではないし。

「引き受けよう。僕がこの町を案内してあげるよ」

「うう。ありがとう、お兄さん……」

これで明日の食ふちは確保することができた。

・狙われるフィウォン レイニー

+++

朝の市場は、たくさんの人でにぎわっていた。
主に食料がメインで扱われているで、普通の人は見てもあまり面白くないのだけれど、フィウは楽しんでいるようだ。
物珍しそうに、色々な店を見て回っている。

朝食は市場にある広場で食べることにした。

「ところでフィウはこの町には何しに来たの？」

「観光～」

彼女は売っているものを手に取りながら答える。

「こんな辺境に、わざわざ観光に来るなんて変つてるね」

この国の首都からは遠く離れ、一年を通して極寒の枯れた土地は作物も育たない。

住むのには、過酷過ぎる環境には動物もほとんどいない。
低すぎる温度は、モンスターでさえ拒絶する。

「そう?結構面白いわよ」

「それなら別にいいけど」

そんな話をしていると、僕らの隣で飯を食べていたカップルの世間話が聞こえてきた。

「役人から聞いたのだけれど、この近くに【鉄の騎士団】が
来ているらしいわよ。噂だとこの町を狙ってるんじゃないかなって…」

・【鉄の騎士団】

荒くれ者の元傭兵が集まつてできた私設部隊。しかし、騎士団とは名ばかりでやつてゐることは盜賊と変らない。

彼らに襲われた町は、すべての物が奪われ、何も残らない。

この地域には、この町以外に彼らの獲物としてめぼしいモノはない。

十中八九、この町を襲つつもりだろう。

「どうしたの？」

黙り込んでいる僕にフィウが話しかけてきた。

「ああ、なんでもないよ。フィウ。観光は今日で終わりだ。僕が送つてあげるから、君の住んでる町に帰ろう」

【鉄の騎士団】に襲われたら、ろくな警備体制が敷かれていない、この町はひとたまりもないだろ？

「もしかして、【鉄の騎士団】を気にしているのかしら？」

「なんだ。聞いてたんだ。じゃあ、話は早い」

「逃げるの？」

紅い眼が僕を見つめる。

「そうだよ」

当たり前だ。まがいなりにも私設部隊、それを相手にして勝てるわけがない。

「でもきっとこの町の人たちは戦うわ。自分の住んでる場所を守るために」

そんなことはわかってる。

極寒の荒地を一から開拓してきた人達だ。

自分たちが作り上げてきた町を安々と明け渡すはずはない。

「そんなこと言つたって、お前は死んでるんだよ」
口調が少し荒くなる。

「あなたが戦うのなら、私も協力してあげるわよ。剣士わざ」

彼女は僕のこと挑発するよつに言つた。

・狙われるフィウォン vs 【鉄の騎士団】

+++

私設部隊、【鉄の騎士団】を相手にすることになった。

「あれだけ偉そうなこと言つてたんだからなんか良い案、あるんだろうね？」

僕はフィウに尋ねると、

「お兄さんの意見を先に教えてよ」と答えた。

まあ、いいや。僕の作戦をまず話そつ。

「もう少ししたら、いや【鉄の騎士団】がこの町に来ることが確定したら、自警団による対策本部が設立されると思つんだけど」

「お兄さんは、それに入つて戦うんだね」「フィウはうれしそうに言つてくる。

なにがそんなに楽しいのだろう。

死ぬかもしれないのに、いや死ぬ確率のほうが圧倒的に高いか。

「いや駄目だ。そんなことしたら、敵を叩くチャンスが無くな

る

彼女の言つたことを否定する。

「じゃあ、どうするの？」

無邪気な子供のよつこ、僕に尋ねてくる。

「地の利を生かす。渓谷を抜けたために使う、山を回りこむよう

に作られた一本道がある。奴らがそこを渡り終わる寸前に爆破する」

対策本部ができるのなんて、敵が町の近くに来てからだろ。

そんなの待つてたら、相手の良じようにされるだけ。

敵が多かるうが、少なかるうが、戦力に余裕があろうが無かるうが先手を取ることが大事なんだ。

少しでも、こっちが有利な状況に持ち込む。

「え？ でも渡つてる最中に壊した方が、たくさん敵を倒せるんじゃないの？」

「そんなことしたら、生き残つて逃げた部隊の奴らに体制を立てるおす時間を『えること』になる。だから、まずは退路を断つ」

「残つた奴らは？」

「渓谷の橋を使つてきたらそこで迎え撃つて 橋を落とす」

「橋を使わないので山中を抜けてきたら？」

相手はプロの戦闘屋だからそつちの可能性が高いだらう。わざわざ橋なんて、トラップしけけやすそうな場所使わないよな。

「まあ、橋を使えないよつて落としてから うーん、あんまりやりたくないんだけれど山に火を放つ」

「え ッ？」

僕の言つたことに驚くフイウ。

「なにか？」

山に閉じ込めて、全員焼き殺す。

「ちよつと、やりすぎなんじゃないの？」

「だからやりたくないって言つてるだひ。でも、普通のやり方でやつてたら勝てないよ」

「キラーマシンは使えないの？」

「あれは駄目だ」

僕は【キラーマシン】を使っている間、無防備になる。
少人数ならまだしも多人数を相手にしたら一気にボロが出て、ス
キをつかれて殺されるのがオチだ。

「まあ、でもその案は却下ね」

フイウは、そんなの話にならないわといった感じで両手を挙げて
僕に言い放つ。

「なんで！？」

意味がわからない。

これ以上の作戦なんてあるのか。

フイウは、黙つて自分のとがった耳を指差す。

「……」

そうだ彼女は、エルフだ。

エルフを目の前にして、山を燃やすとか　非常にマズイ。

殺されても文句言えないレベルだった。

エルフは山を住処として、精霊と共に生きているのだから。

・狙われるフイウォン √S【鉄の騎士団】 2

+++

僕は【鉄の騎士団】が陣営を敷いた場所のど真ん中に座り込んでいた。

鉄の騎士団の兵士達が、僕の周りにたくさんいる。武器の手入れをしたり、仮眠をとったり、簡単な食事を取つたり、話し合つたりしている。

数は40人ぐらいの一個小隊といったところだ。

(……思ったより数が少ないな)

だが、僕のことと一緒に留めるものは一人もいない。なぜならフイウの魔法によって僕の体は透明になり、見えなくなっているから。

しかし、見えないといつても敵の陣営の真っ只中、僕自身気が気でない。

見つかったら確実に殺されるだろう。

(ていうかこの作戦つて、結局のところ正面突破だよな)

僕の考えた奇襲は、全面的に却下されたためフイウの考えた作戦が決行された

それはとんでもない考え方であり、言つなれば大胆不敵なモノである。

どうしてこんなことをすることになったのか。

「フィウの言葉に乗せられたからだろうか……たぶん違う。

「キラーマシンの腕輪」という強い力を得て、舞い上がっていたせいだ。

自分で気づかないうちに慢心していたのだろう。

つまくやれば自分の力で解決できるかも知れないと勘違いしてしまったのだ。

結局のところ、それは【キラーマシン】と「道具の力であり僕自身の能力とは全く関係ないのに」。

今から3時間前

フィウは僕にとんでもない内容の話をする。

「いい? まずは相手を近くまでおびき寄せるの」

「それで?」

「相手はこの町を襲つために一度、軍の体制を整えるから、その時に強襲する」

「体制を整えるとは限らないよ。僕が敵だったら野営なしで町を攻撃する」

時間を置けば置くほど、相手に準備する時間を『え、攻略するのが厄介になる。

傭兵上がりの軍人がそんな悠長なことやるとは思えない。

「大丈夫。相手は油断している」

「うーん。【鉄の騎士団】の噂を聞く限りじゃそんな感じしないけどな」

「賭けてもいいよ」

彼女はもう言つけど、賭けに勝とうが負けようが関係ない。選択ミスして死ぬのは「ermenだ。

「まあいいや。相手が野喰をすると仮定して、その後どうやって相手とやりあうつもりなの？」

「お兄さんと、わたしで協力してやつけるの」

「…………」

無茶苦茶だ。

殺してくださいといわんばかりの作戦。

「まあまあ、話を最後まで聞いてよ」

「どーぞ」

一応最後まで聞いてみる。

「ちょっと見ててね」

フィウがそう言つと、彼女の気配が希薄になる。そして、存在が認識しにくくなり、やがていなくなる。

「 消えた！」

僕はあわてて前後左右見回す。

何処にも彼女の姿を確認することができない。

「どう?」

いきなり彼女の姿が現れた。

「うわッ！？ いきなり出てくるなよー」
びっくりした。

何と言つかパツと出でたといつよつは、彼女の姿を「気づく」とができるいなかつた感じがする。

「 いきなりしか出られないの。でもコレは使えると思わない？」

「 ああ、すげえな」

完璧に姿を消す技術もすごいけど……。

全く詠唱しないで魔法を使っていた方が驚きだ。
どういう仕掛けなんだ。あの腕輪に秘密があるんだろうか。
まあ今はそんなこと、どうでも良いけど。

「この魔法を使えば、気づかれないとここまで潜り込め
るわ」

「潜り込んでどうするの？」

「キラーマシーンを使う」

フィウは右手の人差し指を立てながらそう言った。

「だから、あれはダメだつて」

対少人数用の武器だ。

「操っている人間が何処にいるか解らなければ大丈夫だよ

「うむむ」

確かにその通りだ。

キラーマシンを使う時のネックは二つある。

操るために近くに居ないといけない。

操作に集中するため無防備になる。

姿が見えなければ攻撃されることもない。二つの弱点を解消する

ことができる。

単純に考えればだけど。

「わたしの魔法で、戦場に絶対攻め込まれない見えない城をつく

る

「…………」

「そして、そこでお兄さんが戦うの。わたしは絶対に本丸まで攻
め込ませない」

フィウには相応自信があるんだね。全く引く気配がない。

「わかった、とりあえずそれで行こう。でも、相手が野営しないで突っ込んできたらこの作戦は無しだよ」

「いいよ。絶対に突っ込んでこないから」

彼女は胸のところで腕を組み自信ありげにそう言つ。

なにを根拠にそうこうことを言えるのか。その時の僕にはわからなかつた。

・狙われるフィウオン VS 【鉄の騎士団】 3

+++

敵陣で、姿が見えなくなる魔法を使用中。

フィウの右手人差し指には、赤い火がともっている。

僕の常識的には、魔法使いの出す魔方陣は地面に書き込んだり、浮かび上がったりする平面的なものだと思っていたのだけれど……。彼女の出したそれは、空中に光が投影されるカタチで存在していた。

僕らの周りを円を描くように、光の文字が立体的に浮かび上がる。どれだけ高度な技術なんだろう。それを操るフィウの精神力も相当なもののはずだ。

僕は関心していた。

【鉄の騎士団】は、フィウに言われたとおり、見通しの良い平原に陣営を敷いていた。

何と言うか、完璧に油断している。

これから町に進撃しようとしている軍隊には見えない。
まあそれだけ、余裕つてことか……。

「よし、陽が沈む前にカタをつける」

どうせ僕とフィウは見えないのだから、闇にまぎれて襲いかかる必要はない。

視界が良い時に、仕掛けたほうが僕の狙いが定めやすい。
僕はフィウに戦闘を始める合図すると、彼女はそれに頷く。

↗キラーマシンの腕輪↙を使用した。

＊＊＊

【キラーマシン】が戦闘に参加した。

何もないところから不気味な機械が現れたことに驚いた【鉄の騎士団】はあわてふためいている。

逃げ惑う兵士に向かつて↗雷撃の弾丸↙を打ち込む。
兵士を一人倒した。

丸腰の兵士に向かつてサーベルを振り下ろす。
兵士を倒した。

テントに向かつて↗炎撃の弾丸↙を打ち込んだ。
激しく燃えさかるテント。

上半身はだかの兵士はキラーマシンに、剣で斬りかかった。
ノーダメージ。

キラーマシンはサーべルで反撃した。
兵士を倒した。

燃えさかるテントの中で兵士が3人倒れた。

兵士が弓でキラーマシンを攻撃。
ダメージを与えられない。

奥にあるテントに向かつて炎撃の弾丸を使用した。

兵士を倒した。

奥にあるテントに向かつて炎撃の弾丸を使用した。テントは、激しい炎に包まる。

圧倒的なキラーマシンの性能。

いくつもの戦闘をかいぐぐつてきたはずの【鉄の騎士団】兵士がいともたやすく殺されていく。

こちら側の一方的な攻勢は、僕の気分を悪くさせた。

人を殺すのは良くないことだ。そんなことはわかっている。

けどそんな中で、命のやり取りにおける人間の存在の重さみたいなモノが、全く感じられない。

このままだと自分の感覚がおかしくなつていく。

人を殺すことに何も感じない人間になつてしまふ気がして怖くなつた。

・狙われるフィウォン　vs【鉄の騎士団】 4

「これからが本番ですよ」
フィウにそう言われ現実に引き戻された。
戦闘中に余計なことは考えてはいけない。
考えることは後だ。

鉄の騎士団、

【蛇騎士】【サムライ】【呪い師】【炎使い】が現れた。
6人の兵士が現れた。

サムライがキラーマシンに斬りかかる。
キラーマシンのボディに傷がついた。

呪い師が呪文を唱えると地面から泥の手が生え、キラーマシンに
掴みかかる。

動きが鈍くなりサーべルが当たらない。

炎使いが口から炎を吐くとキラーマシンにヒット。ノーダメージ。
しかし、勢いが衰えない炎が透明化していく僕たちの方にもせま
る。

(うわッ！？)

炎はフィウが作った魔法陣にはね返される。
姿を消して魔法も防御できる。
すごい。

【猛獸マスク】が出現とともに、キラーマシンに襲いかかりダメ
ージを与える。

戦闘は続く。

奥の方から、

「このデカ物を操つている奴が近くにいるはずだ。そいつを見つけてブチ殺せ！！」

と良く通る叫び声が聞こえる。

キラーマシンを近くで操つてることが敵に悟られた。

(……でも、いる場所はバレてない。まだいける)

キラーマシンに、雷撃の弾丸、氷撃の弾丸、炎撃の弾丸を乱射させる。

その場にいた6人の兵士を倒した。

蛇騎士、炎使いと猛獸マスクを倒した。

サムライは、雷電八刀流を使用。

8本の刀がキラーマシンに一気に襲いかかる。

呪い師が筒のような銃を取り出し、不死鳥の弾丸を撃つた。

8本の刀でボディは切り刻まれ、弾丸がめり込む。

キラーマシンは、大ダメージを受けた。

さすがに凄腕の兵士の集まり。

簡単に勝たせてくれない、キラーマシンも結構なダメージを喰らつた。

けれどもまだ致命傷は受けていないし、僕達が隠れている場所もばれる気配がない。

このまま押し切ればなんとかなる

「……ん？？」

キラーマシンの動きが止まる。腕輪に全く反応しない。

魔力がなくなつたため動かなくなつてしまつた。

「え　　ッ！？燃料切れとかあるのかよ…」

よく考えてみたら無尽蔵で動くほうがおかしい。

けど動いてもらわないと困る。

キラーマシンが動かなければ、僕にはもう打つ手がない。

最初にして最後の切り札。

これが無ければお話にならない。

そんなことは、お構いなしに【鉄の騎士団】が動かないキラーマシンに襲いかかる。

呪い師は自分の命を犠牲にして、ヤマタノオロチくを使用した。
地面からハつの頭を持つ巨大な蛇が出現し、キラーマシーンに攻撃。

呪い師は死んでしまつた。

大蛇に噛まれ、左腕がちぎれ右手も壊れた。

ボディは全損。

キラーマシンは壊れてしまった。

僕の装備していた、腕輪も碎ける。

「終わった……」

敵はまだ半分以上残つてゐるといふのだが……。

・狙われるフィウォン VS 【鉄の騎士団】 5

+++

僕の切り札がなくなつた時点では戦闘は終わった。姿を消したまま、戦闘場所を離れようとしたが、少なくとも僕はそのつもりだつたんだけど、あっけなくフィウは魔法を解いた。

僕らの姿は透明ではなくなり、敵から確認できるようになる。

それを見た、敵の顔色が変る。

先程、部隊に指令を出していた男が「やっぱりお前の仕業だつたのか、始の魔女さんよ」と言った。
「なんだわかつてたのなら話は早いじゃない」

僕の隣にいるフィウがいつもより大人っぽい声のトーンでそれに答える。

僕は状況をイマイチ理解できずにいた。

フィウが超高額賞金首の【始の魔女】？

フィウは「降参するわ。私たちはこれ以上関わらないから、見逃してくれない?」と言つ。

（なにを言つてるんだ、いまさらそんなの無理に決まつてゐる……）
僕がそうを考えていると、

それを聞いた先程と違つ男が、

「バカヤロー！！こつちは死人がでてんだぞ！見逃すわけねーだ

「…」

と叫んだ。

思ったとおりの返答。

「手負いのあんた達じや、私に勝てないわよ」

フィウはこんな状況にも関わらず余裕の表情で答える。

けど僕の考えとは裏腹に、この交渉に食いついてきた奴がいる。
さつき部隊に指令を出していた男だ。

おそらく「オイツがリーダーだろう。

「お前が腕につけてる、魔法具を寄こしたら考えてやつてもいいぜ」

そう言つと口の端をつつ上げ、いじわるく笑つた。

「わかったわ」

あつさりと承諾するフィウ。

「オイツ！ 魔法具渡したら終わりだろー！」

魔法具がないと術が使えない。

しかし、僕の話など聞いてない感じで、フィウは手首から銀色の
腕輪を外して男に向かつて投げる。

フィウの銀の腕輪が男の足元に転がる。

それを見た、指令を出していた男は、

「へへへ、バーク。これでお前は魔法は使えねえだろ。残ってる
奴らでここからをぶっ殺せ！…」

「…」

やつぱり思つたとおりの反応。

僕はここで死ぬことになるらしい。

と思つたが違つた。

【鉄の騎士団】が戦闘体勢に入ると、

「

フィウの目の色が変る。

そして

「フィウォン・レイニーの名において命ずる

♪フライング♪と言つと、

自動防御魔法が発動した。

血の色をした無数のハチドリが彼女の周りを飛び回る。

彼女の詠唱が終わるまで自動的に防御。

【百識】

両腕の魔術制御を解除した

フィウォンの両手首に、血の色をした古代魔法文字が円を描くように刻まれる。

紋様一つにつき魔力は2乗される。

紋様は3個、フィウォンの魔力は8倍になった。

魔力の増大により使える魔法が増える。

フィウォンは♪血のイカズチ♪を唱えた。

フィウオンの周りに、円く波立つ血の色の雷。

波紋が広がる。

【鉄の騎士団】に向かって、血の色をした静かな雷が襲いかかる。

音も無く死んで行く兵士達。

地獄から聞こえる叫び声。

【鉄の騎士団】は、跡形も無く消滅した。

一瞬で力タがついた。

ていうか腕輪は無くても魔法使えるんだ……。

ていうか僕、いらなくね。

ていうか今まで【始の魔女】と一緒にいたんだ。

・狙われるフィウォン その後

+++

敵を片付けたフィウはまがまがしいオーラを放っている。黒い眼球の中に紅い眼がある。

超怖いんですけど。

「とこりでお兄さん。キラーマシン無くなつちやいましたね」
そんなフィウに話かけられる。

「そうですね」「なぜか敬語になる。
あの機械は何のために研究所で開発されていたか知っていますか？」

「？」

「実は、私を倒すために作られていたんですよ」

「？」

「研究者がわざわざ賞金首リストに載せて、キラーマシンと腕利きの冒険者を戦わせて実験していたんですよ」

「……」

【始の魔女】を倒すために開発された【キラーマシン】

だからあんなに戦闘力が高かったのか。

その前に、あの機械は魔女に対向するための手段だつたわけだ。それに危機感を感じたフィウはあの機械を探っていた。僕に付きまとつて、キラーマシンの腕輪を欲しがつてたのは、それが理由だ。

「まあ、でもキラーマシンの戦闘能力も見れたし、本体も壊れたし、ヨカツタヨカツタ」

フィウが黒くて紅い目で僕を見つめながら笑う。

「……」

はめられた。

「あと付け加えておくけど【鉄の騎士団】が狙つてたのは、あの町じゃなくて賞金首の私ですよ！」

「あー、なるほど」

どうりで町に攻め込まないわけだ。僕の早とちりつてわけだ。そうか早とちりで無くなつたんだ、あの部隊。

【鉄の騎士団】の目的はフィウを倒すため。

フィウの目的は【キラーマシン】の性能確認と、キラーマシンの腕輪への破壊。

僕はフィウの手の中で踊つていただけ。

情けねえ。すべて彼女のいい様に物事が進んでいる。

「さてここで問題です。私の正体を知つてしまつたお兄さんは、これからどうなつてしまふでしょう？」

悪魔のような表情と明るい声のトーンが全く合って怖い。

「やつぱり、口封じ的な口封じをされるんですかね？」

殺されるのだろうか。

「ぴんぽーん。正解です。でも、お兄ちゃんのことはお氣に入りなので、私の使い魔になるんだつたら助けてあげますよ

「……」

「私に名前を教えてトセー」

「魔女に名前は教えない

「使い魔にはならないって事でいいですかね」

「詰つまでもねえ

これでゲームオーバーだ。

「じゃあ　皿をつぶつて。苦しくなことありますから

「……」

まあ、良かつたとしよう。

【鉄の騎士団】は全滅させられだし、高額賞金首に殺されるなら冒険者としての面目もたつ。

餓死するよりマシだ。

本当は死にたくないけど。

どうあがいても勝てるわけがない。
僕は皿をつぶつた。

「じゃあ、いきますよ」

フイウが動く気配がし、僕は死ぬ覚悟を決め、

マコタをじつじつ強く閉じる。

「 ッ！？」

唇にやわらかい感触。

びっくりして口を開けると、フイウにキスされていた。
悪い冗談だ。全然、笑えない。

まがまがしい雰囲気は消え、田の色もこつものキレイな色に戻つている。

「えへへー、トロルに助けてもらつた時のお礼です」

「何言つてるんだ」

その件は、ご飯を食べさせてもらつた時に付いてこますだ。

「殺しませんけど、じばり監視をせもらつこます
とりあえず助かったんだるつか。

「…………ふう」

ため息をつく。疲れた。ひたすら疲れた。

僕はそのまま田を開じると、深いまどろみの中に身を落とした。

・大家さんからの依頼

+++

「水だ！この家、水道から水が出るぞー！」

僕は当たり前のことを、おおげさに喜ぶ。

滞納していた水道料金を払つたら水が出るようになつた。

約一週間前に倒した敵の賞金を、よつやく受け取ることができたのだ。

次はこのボロアパートの大家のところに行かないといけない。
さつさと滞納している家賃を払わなければ、この汚い部屋を追い出されてしまう。

「いやあ、すみませんでした」

僕は2ヶ月間、滞納していた家賃を大家さんに渡す。

「まったく。ようやく持つてきたかい、次からは遅れるんじゃないよ！」

大家さんに注意される。

「わかりました」

払うアテがあれば家賃なんか滞納しないよ。
と考えながら大家さんの話を聞く。

では僕はこの辺で失礼しますと言つて帰らつとすると、

「ちよつと待ちな

呼び止められた。

「なんですか？」

「確かアンタ冒険者とか言つてたね」

長い人生を歩んできたものにしか出せない意地の悪そうな声で、僕に確認する。

「ええ、一応」

レベルは低いけどな。

「ちよつと仕事を頼まれてくれやしないかい？」
嫌な予感しかしない。

「別にかまいませんけど、どんな依頼ですか？」

家賃を滞納していく手前断ることができない、強制的に依頼を請けることになる。

「山に行つて、とつてきて欲しいものがあるんだよ

「いいですけど、クマとかは獲つて来れませんよ

僕が死んでしまうからだ。

「なに言つてんだい。そんなモン頼みはしないよ。直角ウサギとりんごをとつてきて欲しいんだ」

・【直角うさぎ】

角を持つたウサギ、移動する時は必ず直角に動く。
その身は食べる」とができる、柔らかい毛皮は売ることもできる。

・【りんご】

名産品の果物。この地方で取れるりんごはとってもおいしい。

「いいですか。いつまでにとつてくればいいんですか？」

「明日の朝までは欲しいね」

「無理ですね」

きつぱりと断る。

実質のところ、今日中じゃねーか。

今はもう夕方、今から山に入つたら夜になつてしまつ。
夜の山はとても危険だ。僕の手には負えない。

「チッ。しけてるね。じゃあ明日中でいいよ」

「それならいいですよ

(……舌打ちされた！？)

このババア、人に物を頼む態度じやねえ。

僕は【直角つせき】と【りんご】をとつてくれる依頼を受けた。

・大家さんからの依頼 2

+++

「よつしゃ ッ！」

【直角うさぎ】をよつやく倒した。

2時間以上かけて捕獲。

うさぎを斬りつけようとする直角に避けられ、僕が体勢をくずしたところに角で突つつかれる。

というのをずっと繰り返され、けつこうなダメージを受けた。初級者向けモンスターに苦労しそぎだな……。

でもあと残っているのはりんごを取つてくるという、じぐじぐ簡単なミッショングだけなので心配ない。

山を下つて、しばらく行くと【りんご】がなつている木がある。そのまま進んでいくと、看板があった。

『クマ注意！…』

と書いてある。

「ほづ」

クマが出る山には、良くある看板だ。きつと注意していれば大丈夫なのだろう。

ガサツ 物音がする。

「…… ッー？」

びっくりした。

クマが出現したのではなく、音がしただけだといつことを確認してほつと胸をなでおろした。

なんだかんだ言つてもやつぱり怖いのだ。

だが、クマはモンスターと違つ。

無差別に襲いかかつてくるわけではない。

例え遭遇しても目をそらさずによつくりと後ずされば大丈夫。

……なはずだ。

大丈夫じゃなかつた場合はもれなくアウトだ。
クマは力が強い。木に登る。足が速い。

僕のレベルでは勝てないので注意することしかできない。
でも実際のところはいくら注意していても、気の立つてゐるクマ
にあつたらどうにもならないんだけどね。

直角ウサギもまともに倒せない冒険者には手に余る。
そんな感じでクマにビビリながらも、しづら歩き丘を登るどり
んじの木がある平地に着く。

無事、りんごをゲットした。

なんだ。

思つたより今回は簡単だつたな。
直角うさぎは少し苦労したけど。

「てつきつクマとバトルになるかと思つたが、そつはならなかつ
た」

きつと最近、激しい戦闘ばかりしてゐたので感覚がおかしくなつ
ていたのだ。

いくら冒険者といえども、そつそつ命のやり取りをしていたら
まらない。

命がいくつあっても足りなくなる。

「なんならババアに依頼されたモノを届けて、もう一回とこに来てもいいくらいだ」

食料を確保しておけば、お金が無くなつても困らない。

転ばぬ先の杖だ。

どうせまた金欠になるのが目に見えているのだから、保険をかけておく必要がある。

「よし。もう一回やるか！」

僕がそう言つと、

なにか僕の後ろに回りこんだ気配がする。

クマかッ！？

後ろをゆづくづ振り向くと、クマではなく知らないおっさんがいた。

「このりんご泥棒が！大声で『もう一回やる』とか叫びやがって。ずいぶん大胆な奴だな」

「すいません。自生している自然のりんごだと想つてたんです……」

「どうやらさつきのあれは、りんご農園の木だつたらしい。

長い時間をかけて無実の釈明をした後に、理由を説明してりんごを売つてもらつた。

・フイウのお仕事

「あのクソババア……」

僕が今住んでるボロアパートの大家に頼まれた、直角うさぎとりんごをとつてくるという依頼。

結局ただ働きだった。

お礼をもらえなかつたのだ。

ババアにすれば家賃の延滞料金のつもりなのかもしれない。むしろりんごを購入した分マイナスだった。

賞金首を倒してもらつたお金も、そろそろ無くなつてきたしどうしようか。

まあ、そんなこと言つても仕方ない。

地道に働くしかないだろう。

今日はエルフのフイウと会う約束をしていた。

始の魔女にして超高額賞金首。

強大な魔力は、一個小隊の敵でさえ一瞬で滅ぼす。

昼までにはアパートに戻らなくてはいけない。

約束に遅れたら殺されたりするのだろうか。

僕はアパートに戻り、ドアの鍵を開けると誰かいる。
ちょうど部屋の真ん中にある丸いテーブル。

その横にある備え付けの椅子に、背筋をまっすぐにしてフィウが座っている。

まるつきり少女の外見には不釣合いな真っ黒なショートパンツに同じ色のタンクトップ。

その上からショールをコートのように羽織り、足には一般的なモノよりもさらに短いショートブーツを履いていた。

光を吸い込むような闇のショールは、長方形の端下の部分を丸くカットしてある。

小さい体には少し大きめではあるが、細くて白い足と腕を目立たせていた。

ブロンドの髪と黒は、相性が良くコントラストが美しい。

「他人の家に勝手に入るな」

僕は文句を言つ。ていうかどうやつて入ったんだ。

「『じめんなやー』」

棒読み。

「…くッ」

反省している様子がまったくない。

氣を取り直して質問する。

「今日はどうしたの?」

なんか用があるから、わざわざ会いに来たんだる。

テーブルに両肘を着いて、僕を見つめる。

狭くて汚い、今にもぶつ壊れそうなアパートに高そうな服を着た美しいエルフ。

なんてシユールな映像だわつ。

フィウは少し間をおいて話しだした。

「お兄さん。そろそろお金がなくなってきたんじゃないのかなと

思つて」

「……」

「名答だ。

「そんなお兄さんに、仕事を探してきてあげたよー。」

「ええ……」

そんなこと頼んでないし。

大家のババアに続いて、嫌な予感がする。

「ねえ。一緒にしよう?」

フィウはイスから体をのりだし、甘えたような声を出しながら顔を近づけてくる。

彼女は僕の手を取り、両方のあつたかい手でやわらかく握りしめる。

すじく気持ちいい。

「どんな仕事なの?」

僕がそうたずねると

子供のような顔がいやらしくみがんだ。

・フィウのお仕事 2

+++

僕はフィウの仕事を手伝うこととした。

「それで、どんなことをするの？」

フィウは質問を聞くと説明をはじめた。

「MAP商会に捕まっている【エルフの少年】の救出が目的……」

【MAP商会】

天才、ウォーリー氏がたつた一代で築いた巨大な会社。主に投資で利益を出している。投資対象は武器製造、薬や人体の研究をする会社に限られる。

「エルフつながりって訳だ……。その子供は何で捕まつたの？」

フィウの知り合いなのだろうか。

「奴隸商人にさらわれた後、売りに出されたとのことです

「何でまた……」

「希少種のエルフは高い値段で取引できるの。姿かたちも、きれいだから人気もあるらしい」

「酷い話だ。

人間代表とまでは言わないが、僕が助けられるならそれに越したことはない。

「わかった、手伝うよ。それでなんで僕の助けが必要なの？」

「フィウの魔力は高い、軍隊と戦つても勝てるのではないだろうか。

そんなエルフがなぜ、何の戦力にもならない僕の力が必要なんだ
る。

「MAP商会は守りが異常に堅くて、正面から侵入するのが難し
い。例え侵入できたとしてもセキュリティが厳しくて、中を動き回
つて調べることはできないと思つ」

「ちよつと待つて。あの強力な魔法でも正面突破できないの？」

一個小隊を蒸発させた。赤い色の雷。

「MAP商会は兵器会社と強い繋がりがあるから 新型の武器
で武装した兵隊に一度に攻め込まれたら、わたしでも間違いなく殺
されちゃうよ」

「そんなに強いんだ」

あんな強力な魔法を使えるエルフが対抗できない 想像できな
かつた。

「何言つてると、お兄さんが使つてた【キラーマシン】あれだつ
て、これから時代の武器だよ」

「……

そういえばそうだ。

僕のような低レベルな戦士でも使えるようなバケモノ。

トロルを一撃で切り裂き、手だれの兵士や冒険者を何人も倒した、
悪魔の機械。

もう魔法だけ使つてれば戦闘に勝てる時代じゃないんだ。
だからと言つて僕がいてどうにかなる問題なのだろうか。

「実は3日後 MAP商会主催の新型戦闘用マシンお披露目パ
ーティーがあるらしいんですよ」

「なにそれ？」

「もう、にぶいな）。それに、わたしどお兄さんがカッフルとし

て出席するんです。エルフ一人だと怪しまれる可能性があるから」

パーティだつたら屋敷の中に難なく入り込むことができる。

しかも、大きな会社のパーティーともなると、大勢の人人が来て警備も手薄になるはずだ。

「なるほど」

そして、たいていのエルフは人間が嫌いだ

火を使い自然を壊し、争うことが理由だと聞いたことがある。

それなのに、一人で武器のお披露目パーティーにいたらおかしい。

「わたしがパーティーの最中に屋敷の中を探索する」

「わかった。僕はそれを手伝えばいいんだな」

一人で探せば、見つけるのも速くなるはず。

「いや、それはわたし一人でやるの。お兄さんには他にやる」と
僕にできることなどあるのだろうか。
があるわ」

「何をすればいい?」

「詳しいことは、まだ時間が有るから後で説明するけど。大まかに説明しちゃうと、ひと芝居打つてもらいたいのよ」

顔を覗きこむと、彼女の紅い眼が揺れていた。

・フィウのお仕事 3

++++

新型戦闘用マシンのお披露目パーティーが開かれる会場。フィウが持ってきた（何処から手に入れたのかわからないが）招待状を使って侵入することができた。

MAP商会。

町外れの高い丘にあり、人を拒むように建っている。会社というより要塞という方がふさわしい。

建物の周りには、（おそらく侵入者を防ぐためだろう、高い壁が存在している。

「の中に捕まつた【エルフの少年】がいるはずだ。

馬鹿でかい門のところまで細かいセキュリティチェックを受けて中に入った。

当たり前だが武器は持ち込めない。

僕とフィウはパーティーのために正装していた。服は比較的動きやすいものを選んだが、

「動きづらい」

なれない服には変りなく、動くたびに違和感がある。

「我慢してください」

フィウはそう言つ。

いつもは口数の多いフィウ、でも今回の依頼の件を始めてから極端に話さなくなつた。

きっとそれだけ難解な依頼なんだろう。

パーティ会場に着くとたくさん人であふれかえっている。

中央に食事をするための丸いテーブルが配置されており、壁際に

はさまざまな武器や防具が並べられていた。

銃器の弾はさすがに抜かれていたが、実際に手にとつてモノを見る

ことができる。。

でも、今日の最大の目玉である新型マシンはまだ無いようだ。
会場の中央に田をやると、今までよりも多くの人が集まっている場所がある。

その中心には、このパーティーの主催者であるウォーリー氏がいた。

それを見たフィウが言つ。

「ではそろそろ始めましょうか」

今回の作戦。

フィウが言つにはウォーリーにはエルフが必要らしい。

実験に使うらしいのだ。人間に比べて、はるかに長く生きるエルフを調べて、人の寿命をのばす薬を作ろうとしている。

死はない、もしくは長生きできる薬が完成すればこの会社に大変な富をもたらす。

もし自分の命より長く生きることができるようになつたら、いくらでも金を出す奴がいるだらう。

僕からウォーリーに話しかけようとしたが話しかけられない。

取り巻きが多いのはもちろんだが、たくさんの護衛もついており近づくこともできないのだ。

しかし、

「あいつはきっと新しいエルフを欲しがるはず」

それが彼女の言い分だ。

フィウに興味を引いてワナにはめようとしているのだけれど話すことができないのならやりようがない。

しばらくすると、紅い眼のエルフに気づいたのである。ウオーリーがこちらに近づいてきた。

「はじめまして。このパーティーを主催させていただいているウオーリーと申します」

あちらさんから話しかけられた。

僕は、

「こちらこそ、『紹介いただきありがとうございます』
とありきたりの返事をする。本当の所は、他人の紹介状で入った
身なので招待はされていない。

「パーティーは、楽しんでいただけていますか？」

「ええ、もちろん。……一番の楽しみはこれからなのでしょうけ
ど」

「ああ、メインイベントの話ですね。今までにないタイプの兵
器なので、きっと驚かれると思いますよ」

「なるほど。それは期待できますね……」

どんな恐ろしいモノが出てくるんだろう。

「どんな品物なのは、後ほど説明いたしますよ。とにかくで
とてもお美しいお連れ様ですね

フィウのことだ。

「ああ、彼女は私の屋敷で働いてもらっている使用人なんですよ」

「エルフが使用人！？そんな……信じられないですね」

それはそうだ。誇り高いエルフが人間の言いなりになるなどありえない。

「実は、いわくつきのエルフでしてね。目の色を見てみてください

い?
」

「……ツー? 田の色が違う」

ウォーリーは驚いている。普通、エルフの田はブルーだからだ。

僕は話を続ける。

「この田の色でエルフの里を追い出されたらしいのですよ。そこで僕が拾つてやったのです」

ここまでは台本通りだ。

・フイウのお仕事 4

+++++

僕のする話に食いつくウォーリー。

50代前半のことだが、実際の年より若く見えた。何と言つか存在感のある人物だ。

「ほう、それはスバラシイ。いや、……大変でしたね」

「もしや、エルフにじい興味がおありですか？」

本題を切り出す。

「ええ、それはもう。エルフと一緒に生活できるなんて夢のようではありますか」

実際のところは、研究に使うのが目的なんだろうけど。

「よかつたらこのエルフ。お譲りしましょうか？」

「えつ！？」

表情を一変させ驚く。よほど興味があるのだひつ。

「……いや、忘れてください。初対面でこんな話をするものではありませんでしたね」

僕は、いったん話を取り下げる。

交渉をやめるのではない。Hモノに針をよつと深く喰い付かせるために。

「いえいえ、とんでもない。……もしその話を、本気でしたら、お礼はそれなりにさせて頂きますよ」

ウォーリーは面白いほど話に乗ってくる。

「なるほど。まあ僕はどうでもかまわないのですが……あとが、彼女したいですね」

僕はフイウのほうに顔を向けた。

その話を聞いたフィウが口を開く。

「ご興味を持つていただきありがとうございます」

それを聞いた。ウォーリーは彼女に話しかける。

「どうです、よかつたら私の元で働いてみませんか？それなりの待遇と報酬を用意しますよ」

「まあ、素敵です。でも、私を欲しいのなら条件があります。それで直しければかまいませんが」

「ほう、どんな条件でしょう？」

「ゲームをしたいわ」

「ゲームですか？」

あっけに獲られた顔をする。よほど意外な提案だったのだろう。

「ええ、私は人と争うのが大好き。私が欲しいのなら力ずくで奪つてみて」

妖しく微笑むフィウ。

「なるほど。そういうことでしたらかまいませんよ。どのようなゲームでしょうか？」

迷いがない、それだけエルフが欲しいのだろう。

「そうですね。では」

「なんでしょう？」

「【鬼】【リ】【】をやりましょう」

「はて？聞いたことがない遊びですね」

その言葉をきいたウォーリーは困った顔をした。

「ルールは簡単です。追うものと追われるものを最初に決めて、追いかけっこを行うのです」

「わかりました。でそのゲームは何処でやりましょう？」

「私、この場所が気に入ったわ。ここでやりましょう！私が追い

かけられる方（鬼）ということでおろしいかしら？」

「これから、あなたが働く場所になります。気に入つてもうえて良かつた」

「制限時間はこのパーティーが終わるまで、私を追いかけるのは何人使つてもかまわないわ」

それを聞いた僕は耳を疑つた。大事なパーティーの最中にやるのかよ。

そんなの相手が乗つてくるのだろうか。

「いいでしよう」

「では私が鬼で…、10分後にスタートです」

「いいでしよう。メインイベント前の余興にはちょうどいい。必ずあなたを捕まえて見せましょう」

話に乗ってきた。

下手したら新製品の発表会もだいなになつてしまつだらう。

そんなにエルフが必要なのか

+++

鬼ごっこが始まった。

と言つてもこのゲーム、フイウが負けるはずがない。
彼女は魔法で姿を消すことができるからだ。

問題なのは、僕がどうやって逃げ出すかなのだが
僕の手には、フイウがいつも使つてゐる【銀の腕輪】がある。
彼女の話では

昨日。

「パーティ会場に侵入できたら、その間にこの腕輪を持つていてくれ
ださい」

「これでどうするの？」

「前に私が姿を消す魔法を使つたのを覚えてますか?」

「鉄の騎士団と戦つた時だね」

「そうです。実はあの魔法は、その腕輪で消えることができたの
です」

「なるほど」

「タイミングとしては、私が【エルフの少年】を助け出す、もし
くは殺した後に使ってもらいます」

「ちょっと待ってくれ。助けるのはわかるけど、殺すって何だよ？」

「……奴隸として売り買いされた時点でもともな状態で生きているかどうかわかりませんから」

確かにそう言えるだろう。例えば人体実験、もしくは言えないようなことをされて……。

「助けられないような状態だったら殺すっていうの」
僕は彼女に質問した。

「そうです」

フィウは短くそれだけ答えた。

言いたくない事なんだろう。同族を殺すんだから当然だろう。

「わかった。それはわかった。でそれから僕はどうすればいい?」

「少年を救出したら、その腕輪の力を発動させます」

「発動?」

「その腕輪の力を私が発動させると透明になります」

「なるほどね。じゃあ、僕は体が透明になつたら逃げればいいわけだ」

単純なことだ。

姿が消えたら逃げればいい。

姿を相手から見られなければ、いくらでもやりようがある。しかも、この魔法の能力は、この前の戦闘で折り紙つきだ。

「……」

それを聞いたフィウは、返事をしないで頷くだけだった。

+++

けつこうな時間がたつた。
フィウたちがやっている鬼ごっこゲームの間にもパーティーは進んでいく。

間もなく、メインイベント。
タイムリミット。

このパーティーが終わったら僕らの負け。

ちなみにウォーリー氏は、鬼ごっこには参加していない。
パーティーを進行しなくてはいけないからだ。

鬼を追いかける役は、彼の会社の社員が選出されている。

なかなか終わらないゲームに僕は少し焦ってきた。

いや焦る必要はない。

そもそもこの勝負に勝ち負けの概念などなくて、姿が消えたらこの会場からいなくなればいいだけなのだから。

「それでも遅いな」

僕は腕に装備してある、フィウから預かった銀の腕輪を見つめる。
装飾に使われている、ピンク色の宝石が光る。

「おお、珍しいものを持っていますね」
それを見た、ウォーリーに声をかけられる。
うかつだった。

この腕輪の能力を知っている人間に見られるのはマズイ。
怪しまれる可能性がある。

「これが何なのか知っているんですか？」

僕は質問した。

「ええ、噂で聞いたことがあります。見るのは始めてですが。【

虐待を受けた少女の腕輪】ですよね 魔力を封印するための

「え？ 何ですって……」

体を透明にするための道具だろ、これは。

「（）存知ありませんでしたか。はるか昔、王家に強力すぎる魔力を持つた女の子が生まれた時に、強力な魔女によって造られたモノらしいですよ。魔力が暴走しないように押さえつけるための道具として」

「…………」

ちょっと待て、姿が消す魔法が使える道具じゃないのか……ウオーリーが嘘をついているとか。

いや、そもそも今の時点（ゲームの最中）は、嘘つく必要がないのではないか。

・【虐待を受けた少女の腕輪】

プラチナの腕輪に、ピンクダイヤモンドが埋め込まれている。ダイヤモンドで模られた魔法文字によつて装着者の魔力を抑えつける役割がある。

生まれつき魔力が強力すぎた王女様のために、宫廷魔術師が製作した。

奇才カダローラによつてデザインされたその腕輪は、装飾品としての価値も非常に高い。

今のが本当だったら僕はどうやってここから逃げればいいのだ。
なんでフィウは、僕を騙したのか。

僕の頭は混乱していた。
間もなくゲーム終了の時間だ。

黒服の男がウォーリー氏の近くに来て、何か耳打ちしている。

・フイウとの仕事 終了

++

黒服の男から話を聞いたウォーリー氏の顔色が変った。

「どうやら君とあの紅い眼のエルフの目的は、捕まっている【エルフの少年】の救出だったようだね」

(……バレたか)

「まんまと騙されてしまったようだ。しかしながらね。君は逃げなくていいのかな？」

「どうということです？」

逃げたくても逃げられないんだよ。姿を消す魔法が発動するまで動けない。

ていうかそれが頼みの綱なのだ。

「どうやら紅い眼のエルフは、【エルフの少年】を殺して逃げてしまつたようだ……。私の部下が見たんだよ」

「なんだつて！？ 何かの間違いじゃないのか？」

フイウは透明なのに、なんで見ることができるんだよ。

「残念ながら間違いではないらしい。君は見捨てられたのを」

フイウが魔法を失敗するとは思えない。

ということはワザと見られるようにして逃げたってことか。

「そんなハズはない！」

一応反論しておく。

腕輪の使い道が違う時点で、相当妖しいが反論しておぐ。

「何を言つてゐんだね君は氣づいてないのか。はめられたんだよ、あの紅い眼のエルフに」

「どうしたことだ？」

「ここまできたら、僕もまたハメられたと思つがとりあえず口には出さない。

「我々が奴隸商人から購入した【エルフの少年】は知つてゐるかね？」

「…………

もちろん知つてゐる、それを助けるためにここに来たんだから。でも、そんなことは正直には言えない。

「まあいい。【エルフの少年】を奴隸として売り買いする。そんなこと、誇り高きエルフ族が黙つていると思うかね？」

「もちろん黙つてないはずだ。だから助けにきたんだ」「下手したらエルフ族と戦争になる危険性だつてある。

「しかし、あれはもう駄目だ。【エルフの少年】は人体実験の失敗により、もう普通の体ではない。あれじゃあ、ただの怪物だよ」

「最悪だ。戦争になるかもしれない」

最初に懸念していたことが現実になつた。

やはり奴隸として取引された以上、まともな姿で生きてはいなかつたのだ。

可愛そうなことをした。

だから殺して逃げたのか。フィウは。

そして、僕の言葉を聞いたウォーリーは信じられないことを言い放つた。

興奮した様子でこういった。

「戦争？いいね。

いいじゃないか。

最高じゃないか。

戦争になればいい。

私たちは戦争屋だ。

戦争が始まれば人が死に、新しい兵器開発が進み、我々の財産が潤う

「狂つてやがる」

「こいつ頭がおかしい。」

「だが、それを邪魔しようとする愚か者がいる」

「…………」

僕のことだろうか。

「君じやがないよ。あの紅い眼のエルフだ。彼女は怪物になつた【エルフの少年】を殺し もつここの屋敷から逃げ出した後だ

「さつき聞いたよ

最初の予定だと。フィウが逃げるときは僕も透明になつてゐるはずだった。

遅くなっているのは、【エルフの少年】が見つからないからと考えていたが……。

どうやら違つたらしい。

「君は愚か者だ。実際の所【エルフの少年】が無事戻らない以上戦争は避けられない。でもまだ、一つだけ方法がある！成功するかどうかはわからんが」

「どんな方法だよ？」

話しが見えてこない。

こいつがなにを言つているのかさっぱりわからない。

「いいかね。エルフ族ではない、人間の君が【エルフの少年】を助け出すんだ。そして、助けた後に死ぬんだ。我々と刺し違えて！」

「はあ？何言つてるんだ。そんなこと無理に決まつているだろ」「現に僕は、周りを兵士に囲まれ身動きが取れない。

「残念だ。そんな残念な頭をしているからエルフに出し抜かれるんだよ！君は！」

「なんだと！」

酷い言われようだつた。

「あとでツジツマを合わせるんだよ。そんなもの紅い眼のエルフが、エルフの里に帰つた時にそう言えбаいいだけだ。人間の男が自分の命を引き換えにしてエルフの少年を助けようとした。それで、十分じやないか。人間がさらつたエルフを、人間が助けようとした！いい話じやないか！感動するじやないか！その涙モノの英雄譚でオトシマエをつけて戦争を避けようとしているんだよ！」

・フィウとの関係 終了

「…………」

なるほど。
本当にそんなことできるかどうかわからなければやってみる価値
はありそうだ。

おそらくHルフと人間が戦争になつたら、戦闘力であるHルフは
惨敗するだろう。

フィウにしたら、それを避けようとしているのかもしれない。
僕は死ぬけど。生け贋として。

「まあ、いい。興ざめだ。君にはショーを盛り上げるのに協力し
て頂こう。さあ、みなさん！ショーの始まりです！！勇敢な少年
が、我々が開発した新型マシンと対決してくれるそうです！！！果
たしてどちらが勝つか。では、デスマッチのスタートだあ！！
！」

ウォーリは会場の客に聞こえるよつよぶと右腕に「キラーオメガ
の腕輪」を装着。

「…………あれは

マジックか！？

あの腕輪は僕が前に使つてたヤツと同じタイプだ！
最悪だ。

魔法を動力として動く機械。

【キラーマシン】

その新型かよ！？」の会社が製作するのに力を貸していたわけ
だ。

どれだけ強力なのか想像も持つかない。

僕がうろたえるのもかまわず。

ウォーリーは叫び続ける。

「それでは、みなさん…ショータイムの始まりです！…！」

ウォーリーは、>キラーオメガの腕輪<を背広のポケットから取り出し装備した。

戦闘フィールドに、光で魔法陣が描かれる。

(マジで、やべええ…!)

あんな殺人機械が出来たら一瞬で殺されて、ジエンドだ。ウォーリーのフィウに対する怒りの矛先が完全に僕のほうに向いている。

憂さ晴らしで殺されるのか。

でも、ちょっと待てよ。

魔法陣、……魔法。

そう言えば、僕が使っていたキラーマシンも魔法で動いてたな。もしかしたら、アレが使えるかもしね。

「いちかばちかッ！」

僕は半ばヤケになつて>虐待を受けた少女の腕輪<を魔法陣に向かつて投げ入れた。

透明になれないバツタモノの腕輪。

魔力を封じ込めるための腕輪。

ヒュン……。魔法陣から情けない音がした。

僕の予想外にく虐待を受けた少女の腕輪>が魔法を封じ込める。うまくいった。

ウォーリーは【キラー・オメガ】の召還に失敗した。

うわ……ていうかウォーリーの言っていたことが本当だった。フィウから受け取った腕輪は、姿を消すためのモノではなく。魔力を封じ込めるものだつたのだ。

そう言えども、フィウも腕輪外してから強くなつてたよな。

【キラー・オメガ】を呼び出すことができなかつたウォーリーは、「なんだヒツ！？」

驚く。

その一瞬の隙を見て　僕は、

テーブルの上にあつたバターナイフを取り、ウォーリーを羽交い絞めにした後、彼の首にそれを突きつけた。

(……こんなもので人が殺せるのだろうか)
と思つたが。

思ったより効果テキメン。ナイフを突きつけられた、ウォーリーは両手を上げて全く抵抗しなくなつた。
武器を取り上げられればただの親父なのだ。

僕は、彼の右腕にはめられた腕輪を取り上げる。

^ キラー・オメガの腕輪くを手に入れた。

一応戦闘には勝利（……と言えるかどうか疑問だが）できたが、ピンチであることには変りない敵陣営の真っ只中なのだから。

(さて、どうじょうか)

「……フウ ッ」

大きなため息をつくウォーリー。

「どうしました?」

「いやね。まさかこんなカタチで、会社の新型マシンが敗れると
は思つてもみなかつたものでね。とんだ欠陥品だ」

「なあば反則ですけどね」

「いや、負けは負けだ。死んでしまつてはいい訳もできないしね
「じゃあ、どうするんですか? 僕は死ぬまでやつてもかまいませ
んけど」

嘘だけど。そんな」とあるつもりは全くないのだ。

ハッタリである。

「降参しよう。ただし条件がある」

「なんでしょう?」

降参するのに条件つけるのおかしいだる。

一応聞くけど。

「君の腕につけている「キラー オメガの腕輪」と、あそこに落ち
ている【虐待を受けた少女の腕輪】を交換してもらいたい」

「かまいませんよ」

おそらく研究に使うのであらひ。

一度と同じ手で負けないために。

僕の言葉を聞くと頷き、

「それでは帰ります。そして、安心したまえ。今日のことに関しては不問にしよう。訴えもしなければ、もちろん報復もしない」と言つてきた。

「なんですか？」

「今回の取引は成立した。約束を守るのがつかの会社のモットーでね」

「さすが商売人の鏡ですね。ひとりの人間としてはどうかと思いますが……」

僕は命からがら、無事に壁敷から出ることができた。

・新型マシンはかわいい女のト

+++++

新しく手に入れたアイテム。キラー オメガの腕輪を使つたら可愛い女の子が出てきた。

そいつは出てきていいなり、

「私に名前をつけて下さい」と話す。

「名前付けられて言われても……。キラー オメガって名前何じゃないの？」

「それは商品名です。正式名称はXXGP-52Aと言います」

「うーん、名前ねえ。急に言われても思いつかないなあ

「それではとつあえず保留にしておきます」

【キラー オメガ】

予想と全く違うものがてきた。

前に僕が使つていたものは、手に銃器や剣が装備されてる
かにも戦闘用つて感じの機械だったけど

今回の奴は普通だ。

いや武器としての見た目は普通じゃない。むしろ異常だ。

茶色い髪にあどけない顔、背は僕より低く肌の色はこの地域でよく見られる色。

年齢は僕と同じくらい、10代後半と言つたところだらうか。

そこら辺にいる、ちょっとかわいい少女と言えば一番解りやすいかもしねり。

(まあ、機械に年齢つていうのもおかしいか　　)

「ていうか君。勝手に動けるんだね」

前のモデルは意識を集中させてないと動かなかつた。

「ハイ、自動操縦AIが搭載されていますので」

「すごいな。なんか話せるし」

「簡単な会話だったら可能です」

なんか普通だな、イロイロと。この分だと戦闘能力は期待できないかもしねえ。

「ちょっとモンスターと戦闘してみるか」

「了解です」

僕らはモンスターと対戦するために町の外に出てきた。
とりあえず試運転だ。

目の前には、2匹のスライムがうぶうぶしている。

「じゃあ、試しにあそこにあるスライムでも倒して

「了解です」

彼女（機械だけど見た目が人間なので、僕はこう呼ぶ）は、スライムの所までとことこ歩いて行く。

それを見て、とても不安になった。

少女のような見た目による勝手な先入観からなんだらうけど、か

弱そうなその姿はモンスターと戦えるとは思えなかつたからだ。いきなりスライムに、やられて壊れはしないだろうか。そんな心配がある。

【キラー オメガ】は、スライムに攻撃。
殴りかかつた。

「え ッ！？」

パンチかよ……。前使つてたヤツはいきなり銃弾を撃つて、相手ボコボコにしてたのに。

とんだ期待はずれだ。

あんな細腕で殴つてもダメージを与えられるわけがない。

スライムが彼女に殴られた。

そのパンチの威力でスライムが、ほんの少し飛ばされる。
(まあ、外見の割にはいいパンチしてるな)

なんてことを僕が考えてたら
次の瞬間。

スライムが爆発していた。

ドーン!という派手な音を立てて。

・新型マシンはかわいい女のト 食堂

+++

スライムがパンチだけで、木つ端みじんになつた。
あとかたも無くなつている。
うわあ、なにこの威力……。

「……じゃあ、今度はロングレンジ（長距離）用の攻撃をやってみて。そうだな、あの馬鹿でかい岩に向かつて打つてみよう」

「あれですか」

そう言つて近くの岩を指差す。

「違う！違う！あんな近くの岩じゃなくて、一番遠いヤツ」
どうせとんでもない代物なんだろ。
そんな破壊兵器に、巻き込まれたらたまらない。

「わかりました」

と言つた彼女の周りに、いくつもの光の玉が浮かびあがる。

その中の何個かが、光の矢になり岩に突き刺さる。

派手な爆発音とともに岩が碎けた。

（岩がコナゴナになつてゐ……いや蒸発したと言ひほづが正しいかもしけない）

「なにその悪魔みたいな威力の魔法」

「へホーリーベルくです。天使が使う光術系の力を改良したもので360度、全方向に攻撃可能です」

「ホーリーベルつて言つより、裁きの雷つて感じだけどな……もつと出力下げられないの？」

「無理です。これ以上下げられません」

「あー、今ので一番低いんだ……」

「はい」

（駄目だ。使い物にならない……）

弱いからじゃない、スペックが高すぎて手に余るのだ。前のヤツもそうだったけど、今回のはもっと酷い。

これでは子供のケンカに戦車を持ち込むようなもの。例えが変だけど。

まあ、戦争用の機械だ。

力があつて当然なんだろうけど。

戦闘での攻撃力は高ければ高いほどいい。

「稼働時間は連続でどれくらいなの？」

「フルパワーで動き続ければ30分ほどで動けなくなりますが、一般生活レベルの動きでしたら一日中活動可能です」

「燃料はどうやって補給すればいい？」

「人間の皆さんと一緒に食事で大丈夫です」

「…………」

「ええ、ご飯食べるのかよッ！？」

食いつきが増えた。

うち洒落れにならないくらい貧乏なんですねけど……。

僕一人、まともに養えていないと言つのに。

「どうしました？」

「あー、君じばりへ戦闘しないで良いや……」

食事代節約のため」。

* * * *

「ストップ！ストップ！」

「なんでしょう？」

僕らは、食事と燃料補給のために大衆食堂に来ていた。

「食いすぎだろ！」

「そう言われましても、まだ10分の1も燃料補給できません
よ

きょとんとした顔で答える。

すでに日替わり定食の大盛りを五人前も食べている。

もちろん僕は水だ。お金がないから。

家で自炊でも良かったのだが、彼女にとつてはじめての食事といふこともあって奮発した。

「どれだけ食つんだよーもつ、お金ないよー」

「あと、お願ひがあるんですけど」

「なに？」

まだ、他に何かあるのか。

「服が欲しい」

「着てるじゃん！？」

「これ一着しか持つてないんです」

彼女の格好は、体にフィットした襟のある黒い上着に、同じ色のズボンとブーツ。

この国の軍人が着ているものと酷似している。一緒に歩くと少々目立つ格好だった。

「はあ……」

それでも金かかり過ぎだろ。

・ルーシー

+++

僕は賞金首リストの張り紙を見ていた。
少々お金のかかる武器を手に入れてしまつたので、何とかならぬか考えているところなのだ。

「あんまり目ぼしいのないな」

僕は簡単で手っ取り早く儲かる夢のような仕事を探していた。
だがそんな都合のいいものがあるわけない。人生はそんなに甘くないのだろう。

「ちょっとあんた、どっかで見たことあるね。有名人かい？」
後ろを振り返ると、僕の連れである【キラー・オメガ】がオバちゃんに話しかけられていた。

オバちゃん、それは機械だ。有名人ではないんだよ。
パツと見は解らないけど。

彼女は、

「有名人ではありません」と返答する。

「どつかで見たことあるんだけどねえ」
しつこく食い下がるオバちゃん。そして、思案顔になつた。

「そうですか」

それをそつけない返事で返す。

「 そうだよ。ん……、あッ！？わかった！あれだよ。あれ

と周りの迷惑を気にしないような大声で叫ぶオバちゃんは、壁にかけられた絵を指差す。

指差された先には、【ルシール・ザスカイ】の絵が飾つてあった。20年ほど前に活躍した冒険者。勇者一族にして、天使の血を引いた正真正銘のサラブレット。光術系の魔法を得意とした。

魔女殺し。女性。

ちなみにこの部屋には、歴代の勇者、賞金稼ぎの肖像画が飾られている。

その絵を見ると確かにそつくりだ、生き[写]しといつてもいいかもしない。

機械に生き[写]しと言つのはおかしいかもしないけど。もしかしたら、彼女はルシールの姿をモデルとして造られたのだろうか。

オバちゃんは、『そつくりな人がいるもんだね~』と言いながら去つていった。

「そうだ名前まだ決めてなかつたよな」
僕が【キラー オメガ】に話しかけると、
「はい」と短く答える。

「あの絵を見て思いついたんだけれど、ルシールにしようつよ。顔もそつくりだし」

「わかりました。では【ルシール】で登録いたします」

「愛称はルーシーね」

「わかりました」

・【ルシール】

>自動操縦システム<

呼び出した者が指示を出さなくとも、自動的に戦闘を行つ。その代償として細かい指示は出せない。

>ホーリーベル<

光の矢が敵を貫く。

ルシールの向いている方向に関係なく、何処にでも攻撃が可能。

>真実の鏡<

光の玉により魔法をガード。

玉、一個につき一つの術を防ぐ。

>死刑宣告<

触った相手の頭に天使の輪を取り付ける。

天使の輪は、30秒後に爆発。

>魔女に断罪を<

。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2565z/>

理由がない悪意のクエスト。

2011年12月19日17時59分発行